



貨元
本元
本元

成田參詣記卷五目次

成田山緣起

和氣清麻呂贈官 埴生郡四鄉考 寬朝僧正傳

本堂

銅燈籠識

二王門 額字

經藏

三重塔

平將門始末 同鉦旗

御手洗井

寶庫

本坊 額字

遍照院

南光坊

正福院

延命院

奧院

額堂 文晁額

石鳥居

光明堂

大師堂

觀音堂

阿彌陀佛

藥師堂

地主妙見社

白山社

秋葉社

金毘羅社

痘瘡神社

清瀧權現社

弁財天社

聖天社

天神社

淺間社

稻荷社

三宮社

天神社

天國寶劍

倉魂像

古甲

古面

祐天上人百遍名号

圓光大師名号

龍念珠

樂器二種 笙 笛

延元元年碑

明德五年碑

336
卷 5

寺堂村 永興寺 小野忠明夫妻木像

麻賀多神社 印播郡七郷考 船方村 藥師寺 応長元年鐘

宗五墓 下岩橋村 大佛頂寺 弘法大師心經 古鐸 古碑 妙澤不動 吉田陣屋跡 穴真關社

成田參詣記卷五

成田山明王院神護新勝寺ハ埴生郡成田村小あり新義真言宗京師上
嵯峨大覺寺御門跡末たり開山と寛朝大僧正と云ふ本尊大聖不動尊
弘法大師の開眼して高雄神護寺の護摩堂の靈像なりしを朱雀
天皇に御世天慶中廣澤遍照寺寛朝詔と奉りて叛賊平将門伐調
伏のとり其靈驗の現るるを以て僧正下總まで供奉し給ひ修活せり
幾程なく貞盛秀郷が為小将門ハ誅せられり是偏小明王に威徳たり
さて猶東國鎮護は為小尊像と長くこの地小留免ら終り 珍迦羅制多 迦二童子八元
より此地小あり小や今井戸のあり也と童子と云り。海保氏記小永祿 九年六月廿八日公津原より入佛なりと見ゆ論田より古境内の地小移也と言ふや 爾後靈驗日小
新して道俗群集する市の如く小天文中小弓大巖寺開山道譽上
人法器の不满と歎けれ尊像小祈請するごとく殆ど一百日満願の夜不動
明王に利剣を吞血流れて淋漓たりと夢む覺て後智藏大小進道徳善



其二

新羅堤

薬師堂



成田山境内圖
 目黒不動ハ日本武尊ヲ
 祭レリ故ニ祠前ニ華表ヲ
 此地ノモザン例ニヨラシニ赤
 石華表アリ

石鳥居



棟梁集

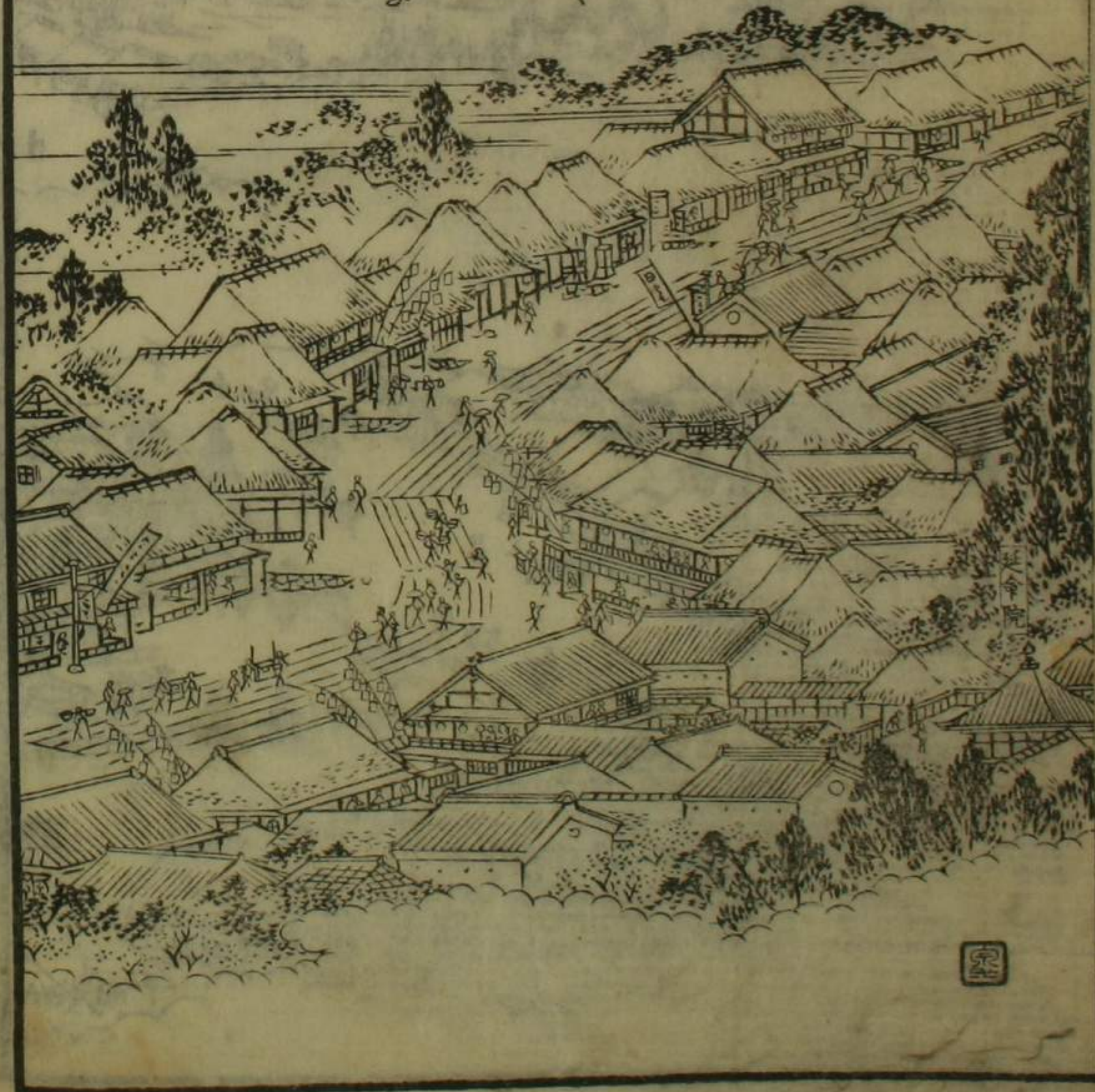
松をこまみのりお

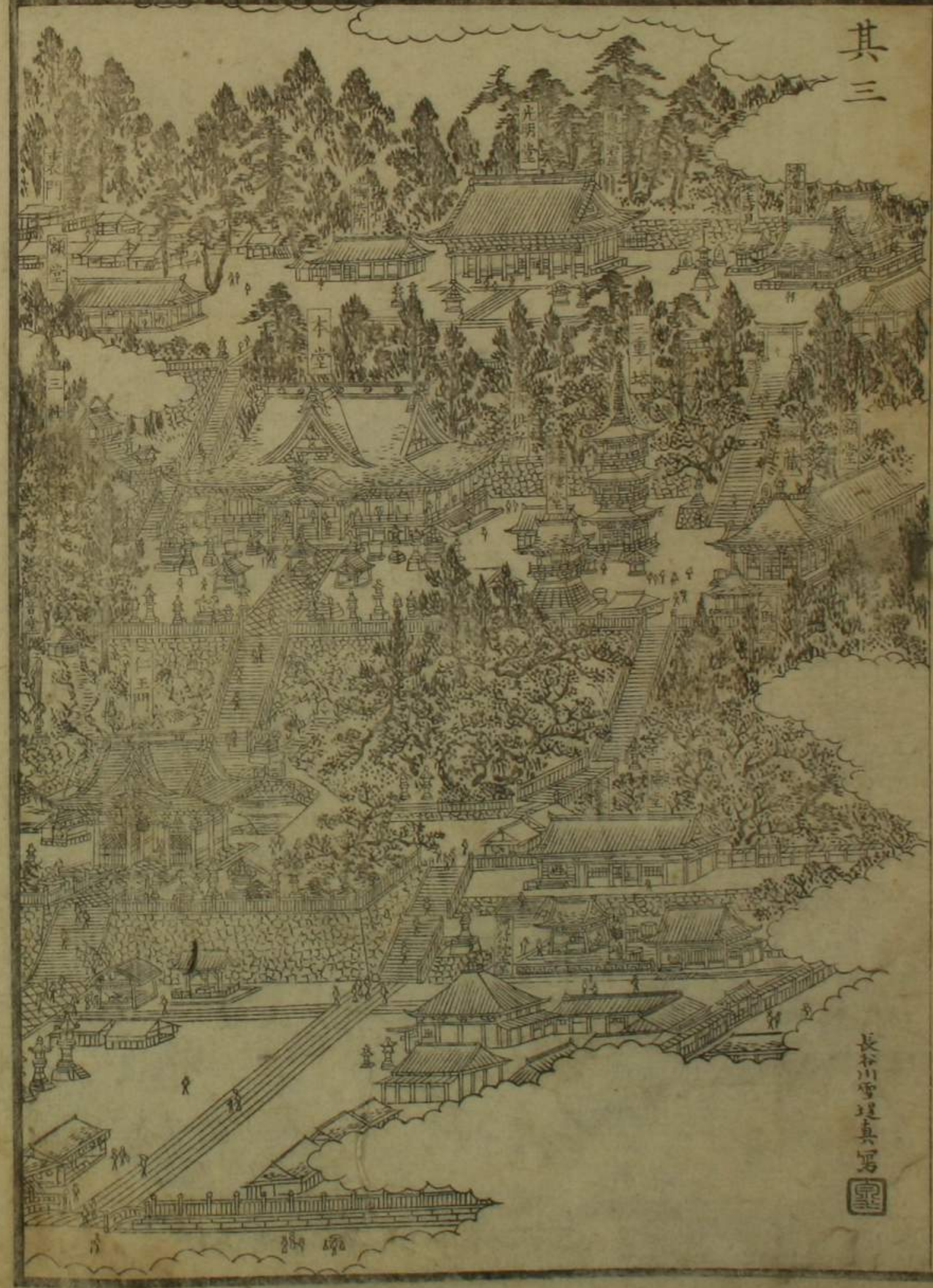
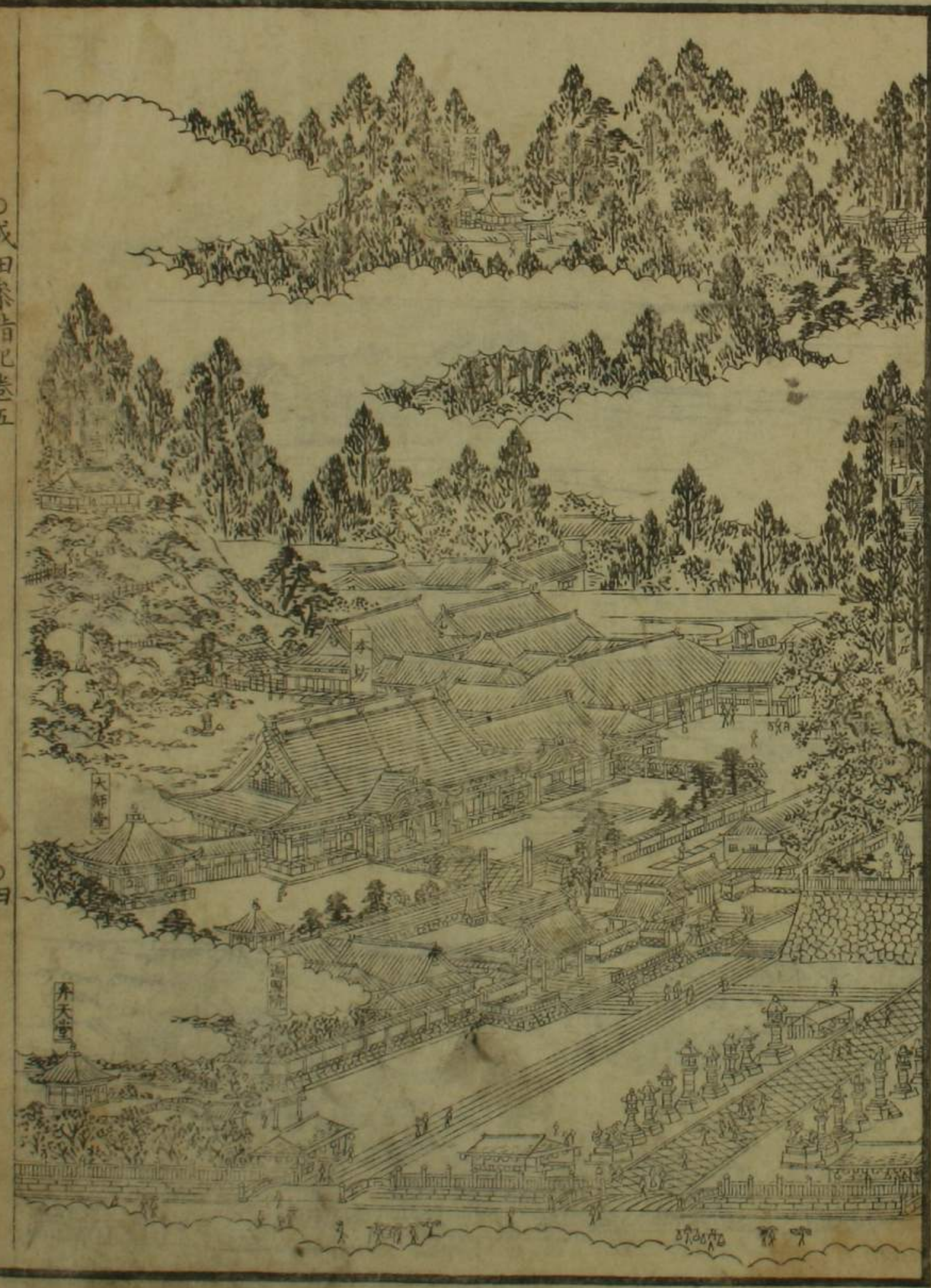
たうをまをひつ

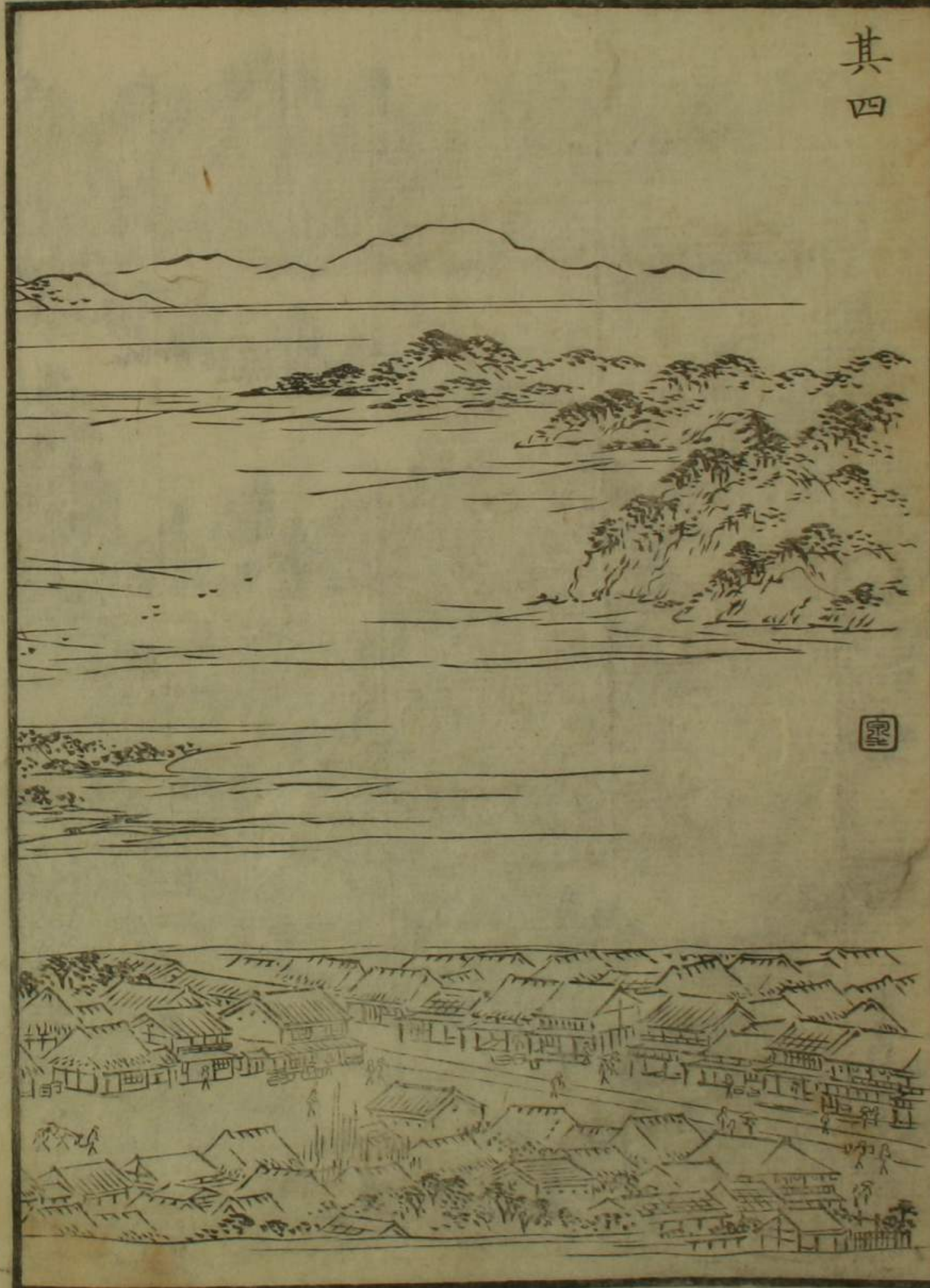
たうろこりぬ

注のこをこ

与清







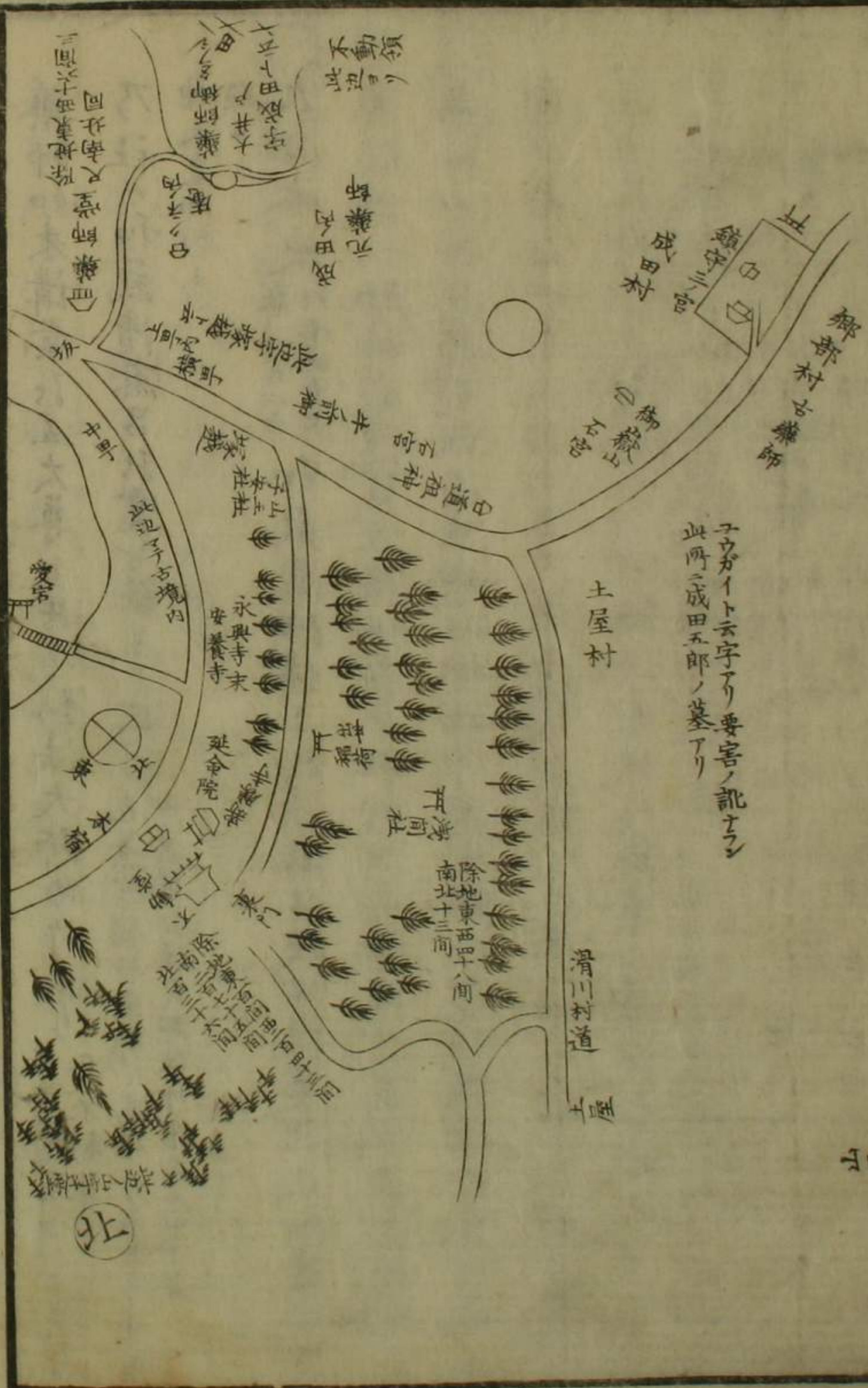
顯社母小名譽の高僧と云れり今其法衣大嚴寺に存一當山開扉のをり拜せ
 一むるものは是より其境たる松杉鬱茂として青苔路を先らるるなり護摩
 修法の烟たゆまなく鈴鐸の音鏘々として國家の昇平を祈り信心肝小銘
 一渴仰胸小溢る堂宇の結構伽藍莊嚴實小本州無比の大道場なり毎月
 二十八日ハ參詣の緇素肩を摩一袖と連袂實前小絡繹たり中も正五九
 月此繁昌ハ喜捨の淨貝堆をなり樂施の清泉漲ふこと一銅瓦雲小霽え
 金鈴風小吟一其金盛なること普く世の知る所小一筆紙小尽一難一他邦
 の人いとたひ此靈區小詣てハ其溢美小非るを知るべ一以上縁起の要と稱む
 歲在庚辰仲夏念八日武城
 愛阜田福菴著覺眼書とあり

○山州名跡志卷七 小高雄山神護寺 光仁天皇此神宇和氣清麻呂奉聞し
 して建立せり所なり今も仍て神願寺と名づく 淳和天皇天長二年當
 寺を以て空海小賜ふ改て神護國祚真言寺と名づく云々金堂此本尊ハ

藥師如來講堂ハ五大尊と共小弘法大師の作あり 五大尊の中尊ハ 護法
 乃社ハ和氣清麻呂此靈と祭ると見ゆ 色兼字類抄太都高野寺元者号神願
 神天皇御 願云々 寺其後弘法大師改神護寺當寺者

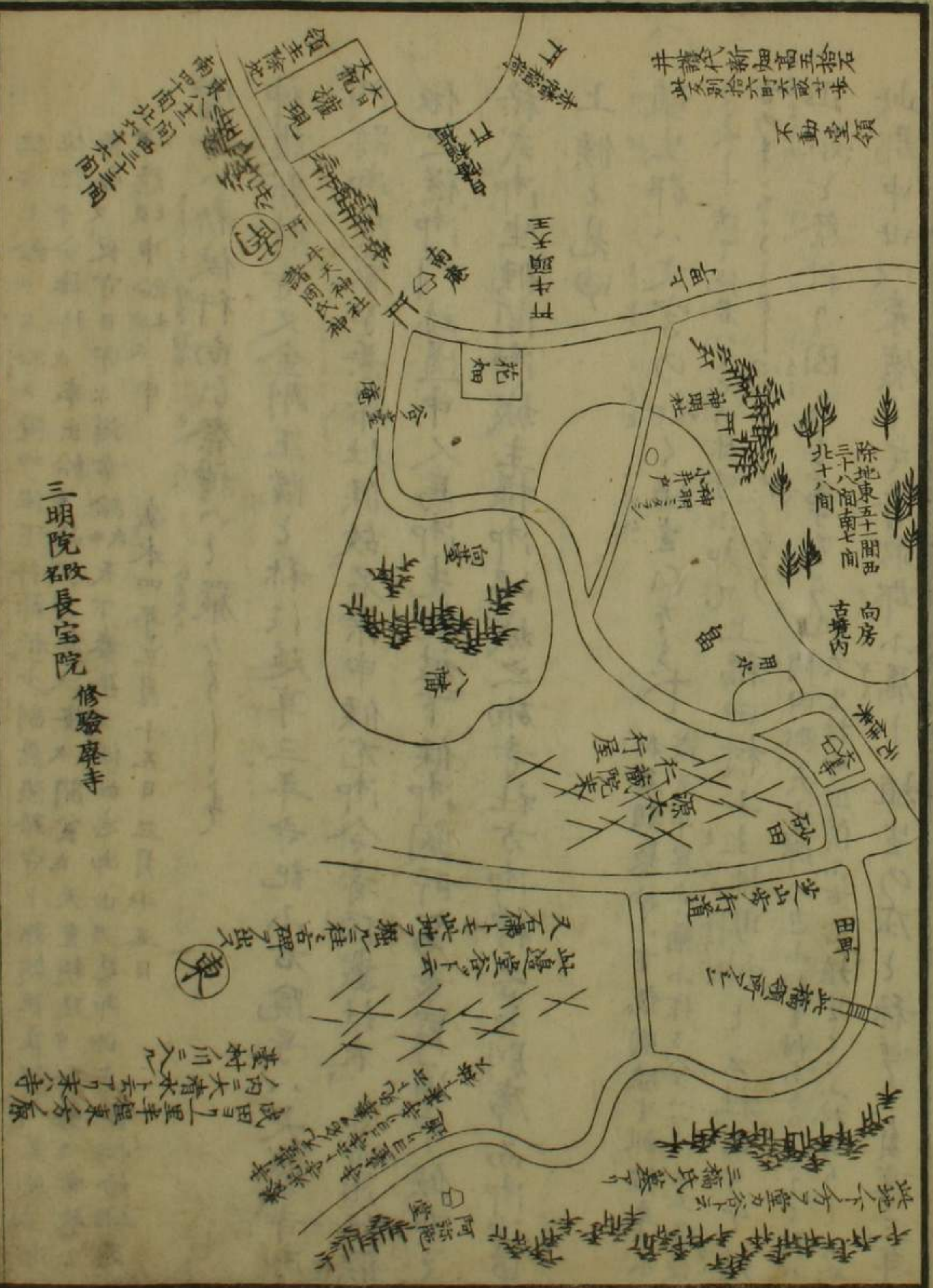
○大日本史卷一百二十 和氣真綱傳小初清麻呂使宇佐還欲立伽藍安佛
 像經論以助神威遭竄不果延曆中私初河内神護寺真綱為河内守与
 弟仲世等請廢定額高雄寺以神願寺為定額改号神護國祚真言寺云
 因云嘉永四年三月十五日護王社ハ朝廷より正一位と贈ら社柳宮より
 三十石の地と寄給ひ一誠小希代の感事たり其宣命小
 天皇我詔昔良方贈正三位行民部卿兼造宮大夫和氣清曆朝臣詔命手
 聞食止宣布奈良官乃却宇淨又貞不明奈心手以任奉加志宇佐爾諸志時
 毛志猶正久直岐真事以慈請問奉留大神相宇豆奈比愛大坐貴入畏岐御
 教言手人成悟志給此慈英給志依心君止臣乃道驗久立此時爾當此汝徹
 波下止志留古乃人乃云志下欺止右有津良身乃危手不顧雄之烈改識乃
 心手尽世留古乃人乃云志下欺止右有津良身乃危手不顧雄之烈改識乃
 彼是以吉日良辰手撰定或護王大明神爾崇給尊給又御冠位手正一

成田山全圖



子ウカイト云字アリ要害ノ記ナリ
此所ニ成田五郎ノ墓アリ

山王鬼田



三明院 長室院 修驗院

位位上給給治給給從四位下行神祇少副兼淡路守卜部朝臣良祥于差使氏御
位記乎令捧持奉出給布此狀平久安久聞食天皇朝廷乎堅磐常磐尔
無動久夜守日守尔護幸給天下泰平尔伊加志御世乃足御世尔護恤給止倍恐
莫恐申給止波久申
嘉永四年三月十五日
當日ハ勅使行向ハ祭禮ハ嚴ナリトシ

神護新勝寺又金剛王院と称に延享三年寺記小右院号ハ大覺寺御
門跡御院家を兼帶仕候故名乘申候尤御令肯頂戴仕衣 著用仕候
依之從御門跡道中人馬御先觸被下候御関所駕乘罷通申候右之
格式御坐候間御城主様御歸城之砌寺社方御禮之旨別席 而御禮申
上候と見申

○埴生郡ハ文字の如く埴生ハヒナト云レト也
和名類聚抄小下徳國埴生訓は年不
或云年異本爾小作今ハト云ふ音便
を云一して地名ハ土人の稱呼小却て
古の埴生ハ多ト云ハ付ヒトナリ
上福田村小土地明神と云社ありて埴
山姫と祭祀り因あり事なりん
岡田郡大生郷の邊小羽生村ありんと小ハ此ハ
大生村の近隣小古ハ埴生と云村ありト云
此郡中世以來廢して香取郡ハ不屬一埴生の庄と稱せり貞享三年

よる復郡小建らる

○和名類聚抄小郷名四段載レト也
本郡竜角寺於天正八年千葉邦胤文書不埴生
十五郷とありとの四郷ハ例の郷司の居一地なりト云
山作の誤ハ山ト云レト也
陸奥國玉造郡訓太考豆久里駿何國駿河郡玉造郷多萬都久里
土佐國安藝郡玉造郷多萬都久利共ハ玉造小ト云作小作ト云
今山口等此地ありん
山口ハ隣りハ
郷部村あり
麻在ハ麻生酢取ハ羽取の訛なりん
伊能頼則云此ハハンプハの省ありん一ハ生ハ元清音なりト云ト江戸の麻

生と壬生の生ハ濁りて生と云來れり埴生を此類なりん
或云成田ハ熟田なり
此他小大井戸と云あり傍ハ成田と云
字あり村名ハ是より起ト云
此地ハ和名抄小載

その所の山方郷の内なりん一近隣小山口村あり
山口ハ山方前と云義なり
ん越前備前等の類證ナ
べ郷部村と云あり
郷部ハ郷分と云義なり
成田村と郷部村の境ハ三宮と稱す
社あり此社の氏子と稱する村十一ヶ村あり是古ハの山方ハ郷の地ふ
山口土屋郷部成田寺甚押畑下金
山東和田関戸新妻都て十一ヶ村也
三宮ハ古ハ郷司ハ崇め祭り
神由急其分内ハ今猶然ること見えたる
佐倉風土記ハ山口村に
稻荷神社あり社傳小



將門記云山阿闍梨修滅邪
滅惡之法社名神祇官祭頭
死頭滅之式七日之間所燒
之芥子七斛有餘所供祭料
五色糞屯云云五大力尊遣侍
者於東土大尊官放神餉
於賊友云云

武後志

寬朝僧正護摩修圖



元弘中千葉貞胤臣山口周防勸清山城國稻荷四社祭馬慶長九年郡官大田氏再造之有七圍松三十年前枯矣見ゆ旧地なること推して知る

○元享釋書卷四小釋寬朝吏部尚書敦實王第二子 寬平上皇孫也從寬空阿闍梨稟密旨永祚二年天祿上皇禮朝受密灌朝粹密學居遍照寺啓密肆世稱廣澤密派永觀元年為圓融寺落慶導師敕給一百戶寬和二年為大僧正長德四年六月十二日化朝善聲明般若理趣分作音調誦之密學之者傳其韻弄

○宇治拾遺物語卷十四小寬朝僧正勇力此ことを載たり同書小仁和寺ともさうけい見ゆ今昔物語廣澤寬朝僧正強力語をのせたり此人凡人小非式部卿官と申け之の所子なり真言弘道小止事无りける人々其人の廣澤小住給々々小亦仁和寺別書もたわり見ゆ日本紀畧小辰天元三年十一月一日庚子廿八日丁卯今日於兵衛府御修法僧都寬朝修法

寬和元年四月一日乙亥廿八日左大臣源朝臣仁和寺西建立精舎大僧正寬朝且有昆弟之義且有師檀之契同心合力所令修營也永祚元年十月廿六日甲戌大僧正寬朝建立遍照寺供養之左大臣以下諸卿參向外記史同集會長德四年六月十二日己亥法務僧正寬朝入滅八十四東寺長者補任東大寺別當次第三小僧正寬朝永觀二年二月二十三日官符真言宗東寺湛昭不治替寬平法皇御資廣澤御室第八皇子式部卿敦實親王二男也中天元四年八月晦日任僧正云寬和二年十二月廿五日別當僧正轉大云伊能穎則云當年寬朝八十四死天慶三年八廿五なり是より四十年を經て天元三年大僧都同四年僧正此後七年を經て寬和四年小大僧正となり天慶の比一頭陀なり

○或書小五大尊中央不動明王本地青龍疏降伏一切鬼魅諸障惱者

七 矜羯羅本地合定惠二手掌本地制多迦本地左手把古杵右手捧金棒

云 當寺の二童子ハ一童子蓮と持一童子古杵と把れりハクナラズマケルヤ

○平将門ハ葛原親王ヲ後小出づ親王ハ桓武天皇の皇子ナリ親王の子を

高見王トシ其子高望姓平氏ト賜リ後五位下小叙一上總介小任セリ

六子あり國香良持良兼良經良文庶子と良正トシ良持鎮守府將軍

小任セラるハ子あり長將軍太郎將持次小田原次郎將弘次相馬小次郎將

門次御厨三郎將頼次大葦原四郎將平次將武次將武次將為之將門ハ母

ハ縣犬養春枝の女ナリ將門下總國豊田郡小居性桀黠トシ勇悍人ト云

れ少シテ擯政藤原忠平に仕て頗る勞と積け此ハ瀧口衛士ト云故

小亦滝口小次郎とも稱せり嘗て忠平公小就て檢非違使佐トナらんト云

求む公許さりりけ此ハ將門憤を懷て郷小歸り徒屬と率ひて攻剽と

事ト云是よりささ前常陸掾源護ハ女姿色あり良兼將門並小婚と

求む護ハ其を良兼小許以良持已小率して良兼將門とその遺田と争ふ

是ハ小たして將門良兼護等と隙あり兵を發して此を攻んと云良兼もと

より佛と信じて忿争と欲せ故小つきた兵を構ふいたらすたすく

常陸人平真樹と云者護及び國香と恨ることありて將門が護を悪と知

り將門と謀りて二人を殺さんと云時小國香ハ常陸大掾トシ石田小居り

良兼下總介トシ上總介を祀り將門の事跡を記するハ今も此所石田小居に

余將門記ふより地理を實踐推考するに盡く符合せしむるハ故小此記を以て本據トシ傍ら

諸書と排列し稍く其事實を得たり且その居所後前多相馬郡ト云然ことト將門記ハ

曲豊田ト云その戰闘地地勢を尋釋するに一的當す故小今新して豊田郡ト云猶畧國ト云

當時形勢は畧と知らしむその備をらすハ後人の再ハ檢査するを待のハ紀畧ハ天慶

二年十二月廿七日癸亥下總國豊田郡武夫奉於平將門並武藏權守後五位下

與世王等謀反虜掠東國信濃國飛騨國是亦豊田郡小居り一證小備へ

○將門の上小外大鏡一外記日記二大日本史三皇和真俗通二本朝文粹二元亨一秋書十等小見の

承平五年二月二日 正統記 將門真樹等兵を率めて護および國香と藤小國

香護等小をを知り護ハ三子扶隆繁と兵を野奔小出たして此を禦

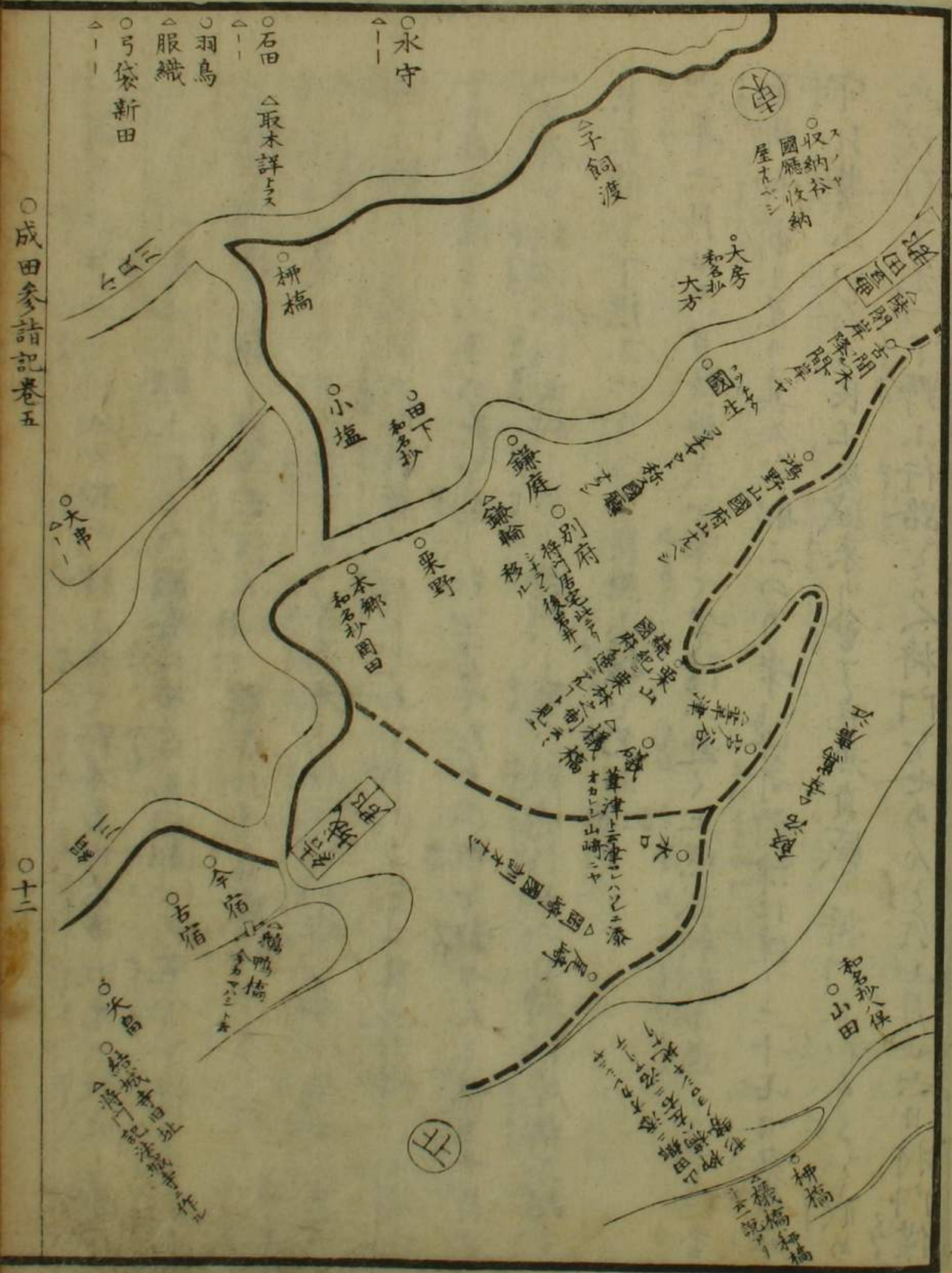
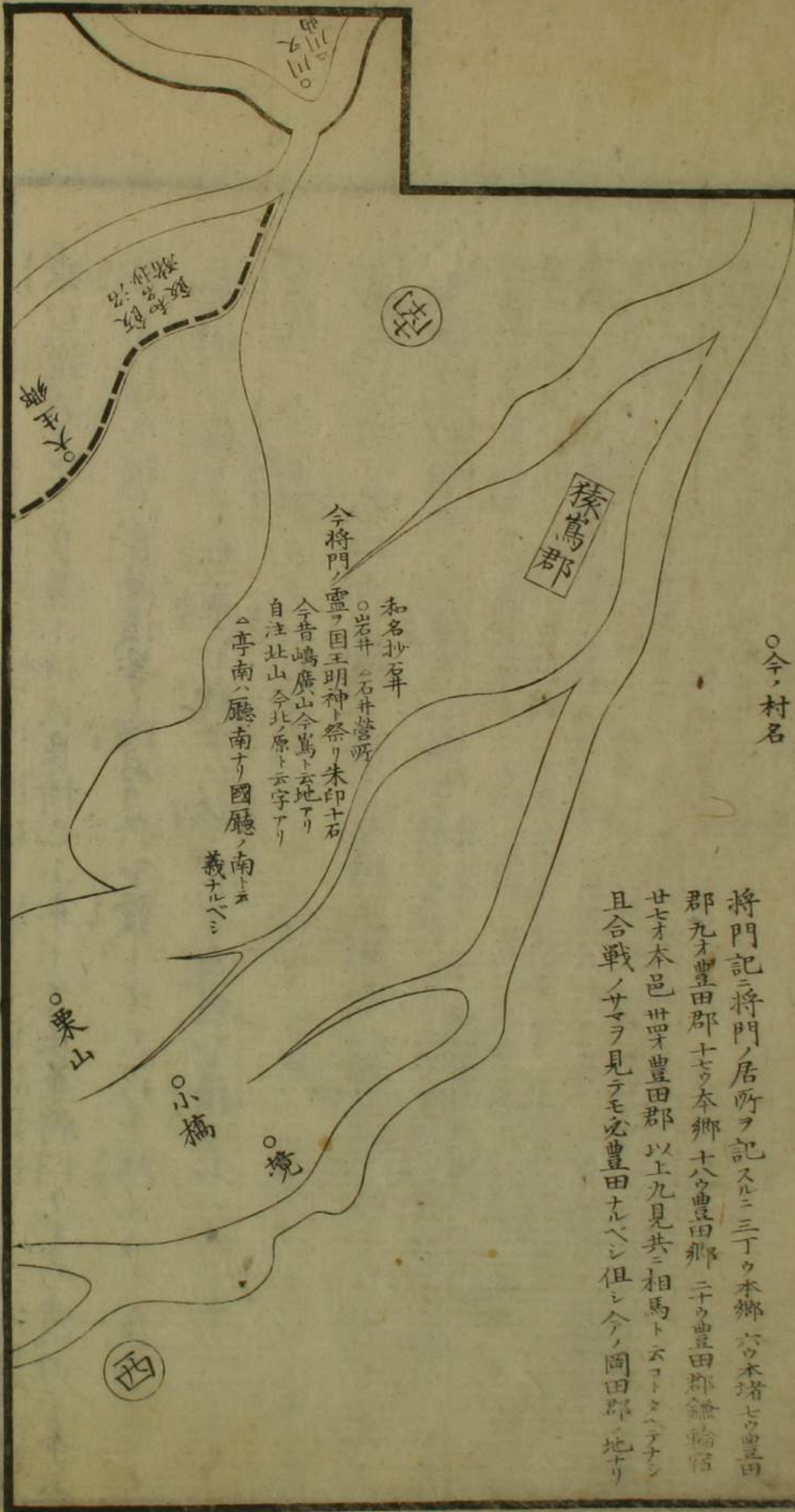
將門記地理略圖

此圖ハ將門時代ノサマナリ
今トハ違ヘリ覽者心ヲ留メシ

△將門記地名
○今ノ村名

相馬郡大井津 大井ト云ヘシ和名抄相馬郡大井
香取郡神前 神崎ナリ

將門記將門ノ居所ヲ記スルニ三丁ク本郷六本塔七々豊田
郡九才豊田郡十才本郷十八才豊田郡 二十才豊田郡餘輪宿
廿七才本邑卅才豊田郡以上九見共ニ相馬ト云コトクヘアナシ
且合戦ノサマヲ見テモ必豊田ト云ヘシ但シ今ノ岡田郡地ナリ



國香扶等敗走四日將門勝小乘て野本石田大串取本小放火一遂に
筑波真壁新治三郡小村より國香扶等及其部下の宅舎を焼く事凡五
百餘家國香自殺し扶等戦没を將門記國香の子貞盛縁平太と稱す十訓抄
常小作る一是よりさき京あり左馬允小任を今昔物語變て聞て慟哭し急に
郷に歸りて父の尸を收葬し伴りて和を將門に乞ふ良正も護れ女婿ふ
りつね小護り三子の死を悲しむをえてため小仇を報せんと謀る十月廿
一日兵と新治郡川曲村小出將門と戦ひ敗走は廿二日將門本郷小歸る
良正使と下總小つりて良兼小援を乞ふ將門記
六年六月廿六日良兼兵を率て常陸小赴く上總武射郡少道より下總香
取郡神前小至り其処に船小のり常陸等前津に達し二十七日黎明水
守に警小いたる良正貞盛來り會て良兼貞盛が將門と和を乞ふを戒め
兵引て先つ下野小行路とて將門とせめんとは七月廿六日將門僅

小百餘騎をともうつ小れを偵ふ試し小歩兵と出でて戦を挑む人馬八十
餘を射殺し良兼等の軍驚き走る是時將門は生兵稍加る遂に良兼を
下野に國廳小逐せし然とも叔父と殺むの名残憚りし小西面の圍と
と良兼を放やる間を得て貞盛等部下千餘人と遁歸り將門此事を
國廳の日記小録し本堵小歸る是より先小護本將門真樹等ら罪惡と京
師小訴へは九月七日朝廷より左近衛番長英保純行英保氏亭自
加友興三使をつつては去年十二月廿九日符と齎らる常陸下野下
總小下して將門真樹および護等を召は十月十七日將門は護等より先に
京小くせまり罪とすつ檢非違使推問して將門理ありとて事輟て究
め將門
七年正月日本天皇加冠四月七日慶ふより赦を行ふ大鏡將門も亦ゆる
れて五月十一日辞して下總小歸る良兼を前故と啣は八月六日兵殘

常陸下総の界子飼渡小出高茂良持二人の像と画陣前小
りて進む將門視て戦ふに退く良兼火を繼りて豊田郡栗栖院常羽御
厩等を焼き翌日兵と引て還る十七日將門出て豊田郡堀越渡下大方郷
小陣良兼と戦ふたゞ將門脚を患へ軍大小敗る死傷算ふ將門妻
子と携へ幸嶋郡葦津江に逃るまた人の怖むと恐れて妻子と船小の
せ廣河小飯沼くも陸閉岸小據る十八日良兼の兵おのく羅め還る十
九日良兼上総小歸うんと幸嶋と過るふたゞ將門の妻子の舟と移
さんととらると土人の告る小遇ふて虜しく上総小還る將門良兼の妻子と
虜小資財と掠奪するの罪と京に訴へるは朝廷符と諸國小下し
良兼と追捕せむむ然とも諸國宰これをたふさぐ九月將門の妻弟某
謀りてその妙を逸し十日將門の妻遁れて豊田小うは是月良兼事あり
て常陸小ゆく十九日真壁郡服織小あり將門兵千八百と持て

襲ひ宿舎と焚く良兼兵千餘人と筑波山小逃竄を將門兵と繼て大小
搜るこく數日廿三日兵と率して弓袋南谿より登り良兼の備あるを見
て兵ととめて戦はる人と遣はるこを偵し尋て豊田小歸る十一月
五日 朝廷符と武蔵安房上総下野常陸等の國小下し良兼護貞盛公雅
公連清文等にちうらと戮せて將門と追捕をさしを命せらる時貞
盛常陸大掾となる公雅公連並良兼の子なり公雅下野守となる公連
清文蓋武蔵安房の要吏たり將門聞ては威勢を張り遠近を恐嚇
す諸國の官吏畏れて朝命とたこなむ獨良兼意を鋭して誅討を
う將門の駈使子春丸と云者あり豊田郡岡崎村に人なり姻家あるを以
て忘るく常陸石田莊小往來に良兼の事を聞て子春丸と招誘ほる妻
九云此方より一人と遣はる共小將門の營中と視て告奉る一良兼よ
ろこんで東徂一匹とあり猶功ある時ハ厚く賞せん事と約す是より先

將門國香と
燒撃とるる圖

○成田參詣記卷五

○十五

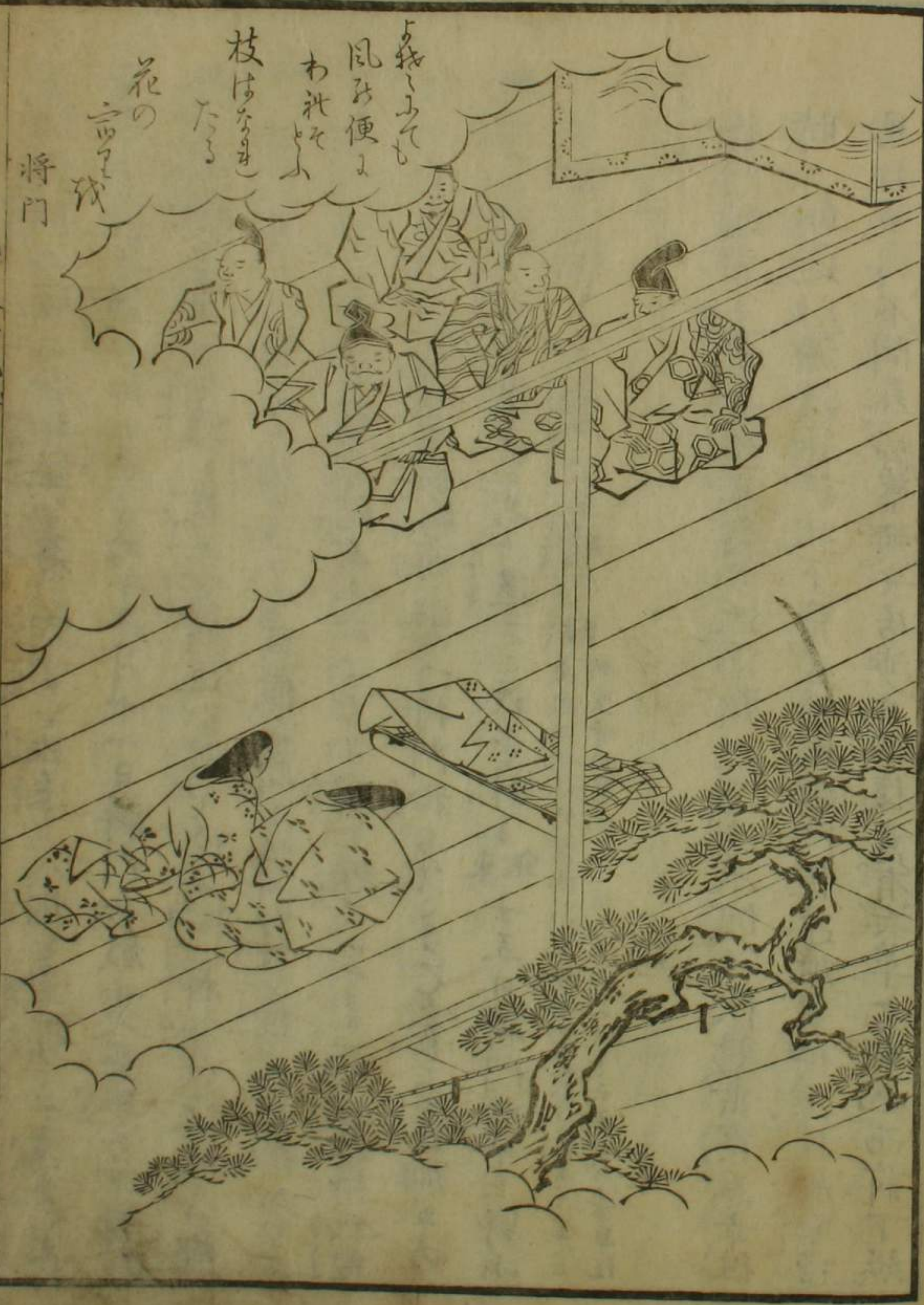


と將門別營と石井小講ふ子春丸乃ち謀者と共小石井小いたり留り宿
まことと兩日密小兵械府庫匿藏密室なり東西出馬口南北通兵の路
と指し示以謀者還りて詳ら小これ告く良無既小その要領と得て夜
小乗してこれと襲えんとは十二月十四日精兵八十餘騎と多らび具小
方略と授け夕小發して石井小赴く亥時結城郡結城寺の門前を過ぐた
まは將門の兵あり見てこれと察し良無の後小從ひ鶴鴨橋小至る
とさう此兵疾く馳入て將門小つく時小管中兵士僅小十人のと共大
小驚く然る小良無の兵營を侵るとは既小卯の時あり方畧施すと得に
くにおつて將門自ら進んで敵と斫る良無の兵披靡を十人の兵氣と得て
響と聯ねて進んだらう其上兵多治良利と射殺をその餘斬殺四十餘
人餘兵とたよ逃散は將門
年三十七
天慶元年正月三日子春丸の事あらはるる將門と殺す是月前武蔵

守藤原維幾菅原兼茂小代りて常陸介小任は外記日記維幾ハ高望の女
婿貞盛の姑夫なり分脈二月貞盛東山道より京に赴く將門急小百余騎
と從ひこれと追ふ廿九日信濃國分寺の傍まで追つて千阿川よりして
相戦ふ貞盛敗れて山中小遁まらうる將門これを搜索す此と竟小見え
して還る貞盛資財と失ひ幸て京に達しつゝ小將門の罪惡と訴ふ
六月良無病死去是月貞盛符を奉りて常陸小歸り將門の上京と促りて
小さう以騎横まらく甚し良無死せしハ貞盛侍らるる小陸奥守平
維扶小記陸奥小遁れんとせし將門小妨けらるる終小果小將門
年三十七
二年將門兵を率て武蔵小到り足立郡司判官代武蔵武芝と將て府小赴き
武蔵權守興世王小値ひ武蔵介源經基等と和せしめんし酒と府衙小置
て相驩を此時經基を山北より武芝の兵の後より者りきた和氣溝
をくをえらり前故と以て經基の營を圍む經基たらるる將門興世と

こくりて武芝うたれ小己と賣るとおもひ倉皇としてのりて京小入る是
よりさき武芝と興世經基と事小なりて相争ふ故小將門にこれを和解して
己が恩威を樹てんとせし小經基逃れ去りけしハ竟小意の如くからん快
として本郷小歸る三月九日經基京に入り將門興世等が不軌と謀るこ
とを讒訴して是より京師駭動を廿五日太政大臣忠平公右少辨源相職
小命して教書を作り詔使中宮少進多治助真小付し虚實を糾さむ廿
八日教書したる五月二日將門常陸下總下野武蔵上野五國解文とらひ
反謀實小あらさると陳る十五日 朝廷使と發し宗廟社稷及び東海
東山兩道に神祇小奉幣し天下に治平を祈る十六日急小東國の守介
以下に官と任る外記十五日宮中虹起ると者兵革兆るるといふ 朝廷
符伐諸國小下たし諸社小奉幣してこれを被ふ十月興世新司貞連と
姻婭して相らるる武蔵と去て將門小依る常陸人藤原玄明居常會

悪くして小民と劫奪し官租と輸せし維幾とまを責む玄明あらたけ
く維幾追捕せんとて玄明これを行方河内兩郡の不動倉に穀糶と
盗下妻子と此亦豊田小走り將門小倚る維幾牒と下總國并將門小
移して捕送るるを責む將門玄明とけり維幾と攻んとし十一月廿日
將門兵を遠近小徴し千餘人を率て常陸小赴き先づ書を贈云玄明と其
居小還し永く追捕を免るると維幾は將門進んで維幾とたぐひ
大小こまを敗り國府を圍み遂に維幾を虜し印鑑を奪ひ國府をやく
貞威及維幾の子為憲とに脱走を掾藤原玄茂をむき降る廿九日
維幾定遠と豊田郡鍾輪小幽るる小たひて興世將門小説て曰今夫一
國を取し誅せしハ州と取も亦誅せらる誅ハ一の顧小安を決する
ぞや將門大小喜んで曰豈たハ州たならん我京師をとらんとも我曹
王室と距ることいよた遠うらる天位小のほるとも可なり今の計を為



花の
 枝は
 風が便よ
 われ
 花の
 枝は

将門

○成田参詣記卷五

〇十八



将門貞盛扶等の
 妻と憐むの圖
 相馬日記三小吾
 友行智優婆塞
 う秋父の田通寺
 来て見一将門の
 木像ハハ
 柔和の相
 と云り

印

ハ先づ近國の國司に印鑑を奪ひ朝官を放逐し八州を掌握して後事と云
ふ小一つはと議つひ小決しぬ十二月十一日將門兵數千人を率ゐ下野に
入る國廳を奪ひ印鑑を收め守藤原弘雅と逐ふ將門押領使藤原秀郷
世下野小居り大族たり往てこゝに候ふ時小將門髪を理り秀郷のつゝ
るを伺て大小喜ひ髪を結ふ小たよむ帽を傾てり見ゆ接待款曲
飯を命じて共に食す飯粒前小左つ將門拾ふてこゝを食ふ秀郷その
輕率と視て為こゝを去り退きこゝを計る東鑑十五日將門遷て上野小
次々書を作りて忠平公小贈て曰更級日記小竹紫郷不見ゆ今のまゝとありとそ。
小や日記の説
將門謹言不蒙貴誨星霜多改渴想之深造次何叙伏賜垂察恩幸往
時 朝廷以源護等訴狀下符召將門將門惶遽應召待罪使廳會遭
恩赦事得不問尋歸舊郷安居涉日不復意有兵革之事也而前下總

介平良無擅動干戈掩襲將門將門不得已草率禦之多受傷殺悉失
資財遂至見擄略妻子矣即託下總國吏解文上言 朝廷乃下符追
捕良兼等私心竊謂彼必蒙嚴譴而反良兼未就逮更遣詔使英保純
行召將門將門以心甚不安不輒應命然亦付具由於純行上言以訴
無罪冀復 朝廷有悟是以渴望報裁常懷悵鬱去年之夏平貞盛奉
符歸常陸依其國司移之下總促將門赴都將門以為彼貞盛黨良兼
者苟免追捕讒構將門 朝廷宜糾治以加譴責也而今以彼讒訴召
將門是 朝廷非受欺謾而何也是以將門又不敢應召也後及得右
少辨源相職書云 朝廷以武藏介源經基告將門下推問將門之符至
是將門始知負罪 朝廷已非一日之故矣適當陸人藤原玄明逃投
將門請救其難將門因收玄明既為從兵問之則曰維幾子為憲假冒
公威凌轢部下是以欲究其事乃到常陸豈料為憲黨貞盛擅發兵庫

器械以精兵三千拒之哉於是將門憤激之情不能復制破為憲擒維
幾遂取常陸國是亦維幾不教其子之罪自招其禍也是以維幾既伏
其罪作書謝過其書現在豈敢矯誣是將門取常陸國固出一時憤激
非故意謀逆也雖然已取一國其罪甚重寧負重罪則孰若併吞諸國
之勝也是以今乃復將盡收印鑑奄有八州矣夫將門之胄出於
桓武天皇距王室僅五世然則縱令永割天下之半享之豈為非其分
哉蓋以戰功取天下者史籍所載古有其人將門天與材武方今誰出
其右而公家不加褒賞屢下譴責省躬多辱對人何顏抑將門少時奉
名簿於太政殿下不意當相國攝政之日舉斯大事雖然豈遺前恩敢
負舊主殿下其亦賜察幸甚

上野介藤原高範が印鑑を奪つて府小入を陣すなり一倡妓あり八幡
大菩薩の使者と称し衆山揚言をらく朕位を陰子將門に授んとし汝等

樂を奏して来迎へよ將門再拜命を聞く全軍忻躍以興世玄茂等將門小
もめて新皇と僭稱せしむ將平諫て曰帝王の業自ら天命あり智力を以
て妄り小冀るべし小あらはに輕躁舉動恐くはそをりを後世小貽さん希く
ハ熟くこれ代慮れ將門をく内豎伊和員經曰君争臣あれハ不義小陷ら
す父争子何ぞ無禮小陷らる事成らされば家と失ひ身と喪は同胞の言
願くハ三思を加へよ將門曰口この言を出は駟馬も及んば汝等歎く衆と
沮むことなりれ二人を退さるる小たわしく下總國亭南を京師小
擬し磯橋と山崎小擬し大井津と大津小擬し興世玄茂等宣旨をつくり
諸國守介と私小任を將頼下野守に常羽御殿別當多治常明と上野守に
玄茂と常陸介小興世と上總介と文屋好立安房守に將文相模守に將武
伊豆守に將為下總守小其餘文武の百官を點定し内外の印と鑄新除目
と行ふたけ曆日博士其人をたのむ是小おしく東國國司争て京に赴き褒

貞盛秀郷等
將門石井の
營所と焼図
享保五年刊本
今昔物語二見



東鑑 寛元三年
十月十日云日采於
京師以正將門合戰
狀被令画圖之去々
参着之間今日於
將軍亦方大殿覽
之教隆讀申其詞
事終有御酒宴
武州經此營云々

秀郷將門と
戦る畠
同前



○成田参詣記卷五

○廿一

と告ぐ將門巡檢と稱し更小武蔵相模小入り又其印鑑と奪ひ再び書と作り忠平公に贈り僭號此事と告ぐて相模より下總小歸る將門 廿二日信記濃國に飛驒京に到り將門を變とつて後告許再三小及びければ諸公卿會議し左右馬寮兵庫寮に命し固圀使と近江伊勢美濃三國小遣はし勢多鈴鹿不破の三國を守り更小東海東山諸國小命して其要路を塞ぐむこまより先伊豫掾藤原純友西國小返るて以て將門と力を戮せん

年三十八 三年正月朔朝廷節會公卿の宴會と傳られ樂をあけ東國變あるを以て日本紀畧 東海東山山陽三道追捕凶賊使と任はれ四位上藤原忠舒東海道追捕使となり從五位下小野維幹と東山道小遣はし正五位下小野好古山陽道小遣はて共小追捕せしむ紀畧 補任六月年例の叙位と傳め使と登り伊勢小奉幣し更小天下の名神小爵一階と加へ東西逆賊の治平と祈る

園太曆

七日宴會亦樂と奏せし 天皇前殿小御せしを再び使と伊勢小遣は

盛衰記

東國に治平と祈る紀畧 抄 西官記將門兵五千と率る常陸小赴き貞盛為憲等と

撃つ那珂久慈兩郡藤原氏族等出迎て之と饗は將門命して貞盛為憲と索めしむ已ふして貞盛扶等の妻と擣りて將門に物を擗て衣一襲と與へ且歌を咏して其志を觀ふ歌云くやうてそ風は使小われそとふ枝るあはれ花は宿と二女うへ貞盛妻云卅うても花の白の散るれは我身わびしとたもほえぬ哉扶妻云花散り我身もふらけ吹風ハ心も□□物こはりなむ將門遂小二人と遣還し更小貞盛等を索ると旬餘竟小得兵と引て下總小歸るこ小ためて將門震ふしとて諸國に徵兵散遣し留るところ僅小千人とたらは十一日將門 記朝廷使を祭し符と東海東山の二道小下し募る不次の賞を以て廿二日僧徒淨藏小治して大威徳法を延曆寺首楞嚴院小修せしむ二月朔こまより先貞盛將門兵士と散遣

と聞て秀郷と議して兵四千餘を下総下野の界不出し将門と攻んと
以将門に社とて大木等々是日予兵を率て急下野不赴く将門自
ら将門前小あり玄茂偽副將軍として後小あり經明遂高等こまに属
兵将門貞盛等の在とてつとを以て經明等たもく山小登りて貞盛秀郷
の軍と睨む山北より經明勇を負て謀ふ獨進んで秀郷小せうら
秀郷もとより智略あり貞盛為憲兵四千を分て夾撃つ玄茂經明等敗
る貞盛秀郷勝小棄て追ひ逼り川口村小到り晡時将門と遇ふ将門躬親
奮戦そ貞盛兵士小令して曰賊も天小背く我も公小奉は今日の
戦必勝我小あり慎て反顧そとふ科兵士殊死して戦ふ将門ほん
と敗れんと以日暮るに會ぬ将門途巡りて退く
将門 八日 天皇紫震
殿小沛して節刀と征東大將軍藤原忠文小授け東海東山兵と將門將
門と討せむ
紀畧 刑部大輔藤原忠舒副將軍とを
将門 右京亮藤原國幹

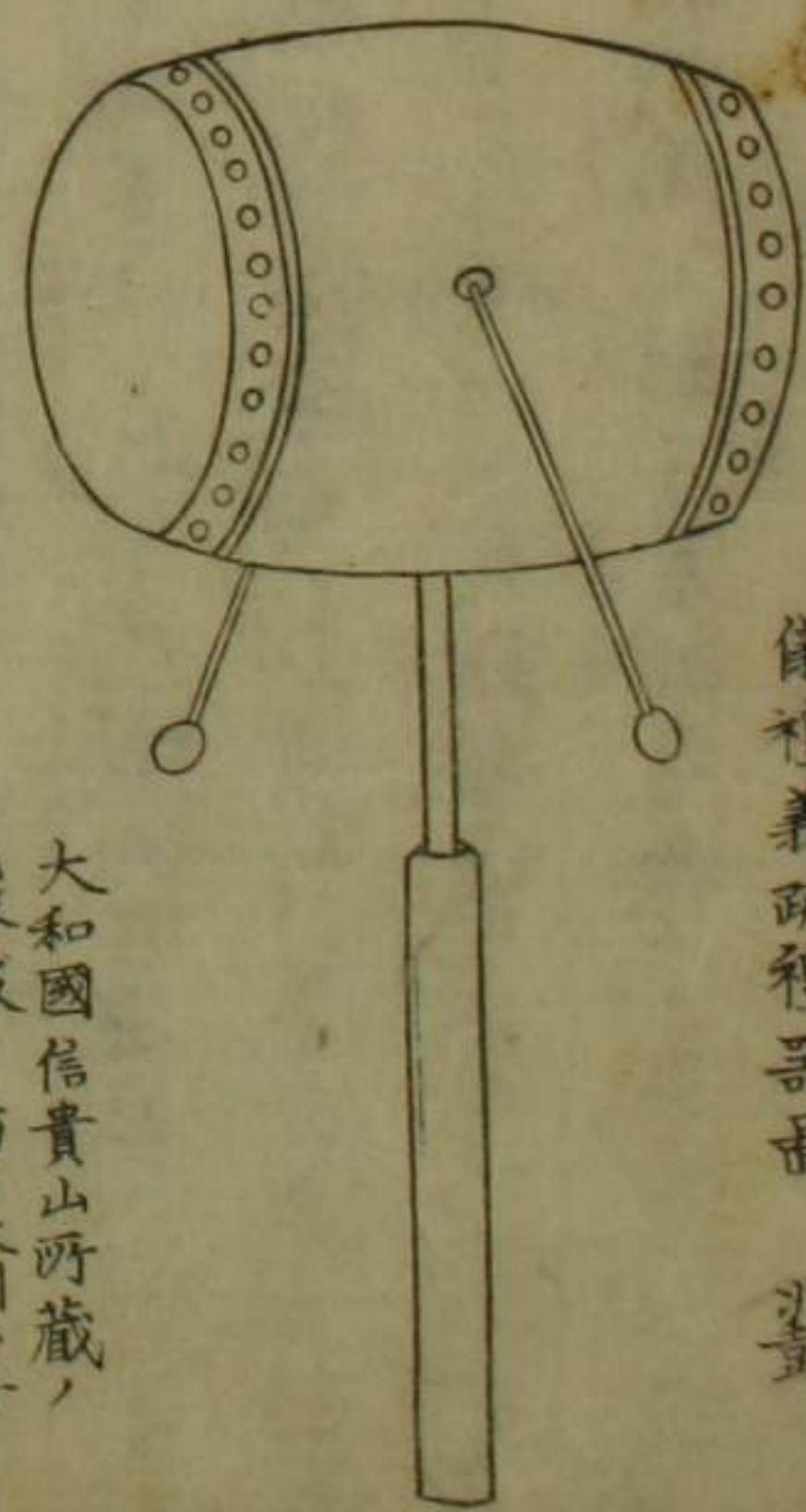
大監物平清基散位源就國源經基等と社小属して東に十三日貞盛秀
郷生兵と調加し将門小下総にせうら將門手兵四百餘を随へ幸嶋廣江小
うと敵と弊らさんと貞盛秀郷とより兵と進て偽宮と焼く社と
もいまた将門に所在とを知らす十四日将門遁れて幸嶋郡北山小往そ衆兵
の會とてをまつ貞盛等と社を探り知る兵と率る赴き攻む晡時兩軍せ
まうつ是日南風とふはた急なり將門の軍南にあり盾をな前小倒れ貞
盛等軍北より盾皆北小倒る兩軍決と乱して酣戦す貞盛の中軍死
たる者八十餘人將門兵響と聯ねて衝突とてはわいて貞盛秀郷為
憲が兵逃る者二千九百人餘るころ僅に三百餘存あり風より社
八貞盛秀郷風小随て進み戦ふ将門馬を馳て奮闘去馬を多く風と忌
て駭さのころ
将門 貞盛射て将門額と洞中に将門馬よりねつ秀郷を
の首と斬る是日将門の黨死す者百九十七人大刀五柄楯三百枚

将門記鉦

自註鉦者兵鼓也諺云
布利豆々矣也

當時軍器ノ鉦ノ制詳ナラス姑見ルトコロノ
樂器ノ品ヲ載セテ考古ノ端ニ備フ

巖島番會ニ載スル凶 非鼓
胴金地極彩色皮金地古色
ニシテ詳ナラス



儀禮義疏禮器品 非鼓



大和國信貴山所蔵ノ
鼓鼓ノ品モ大同小異
ナリ

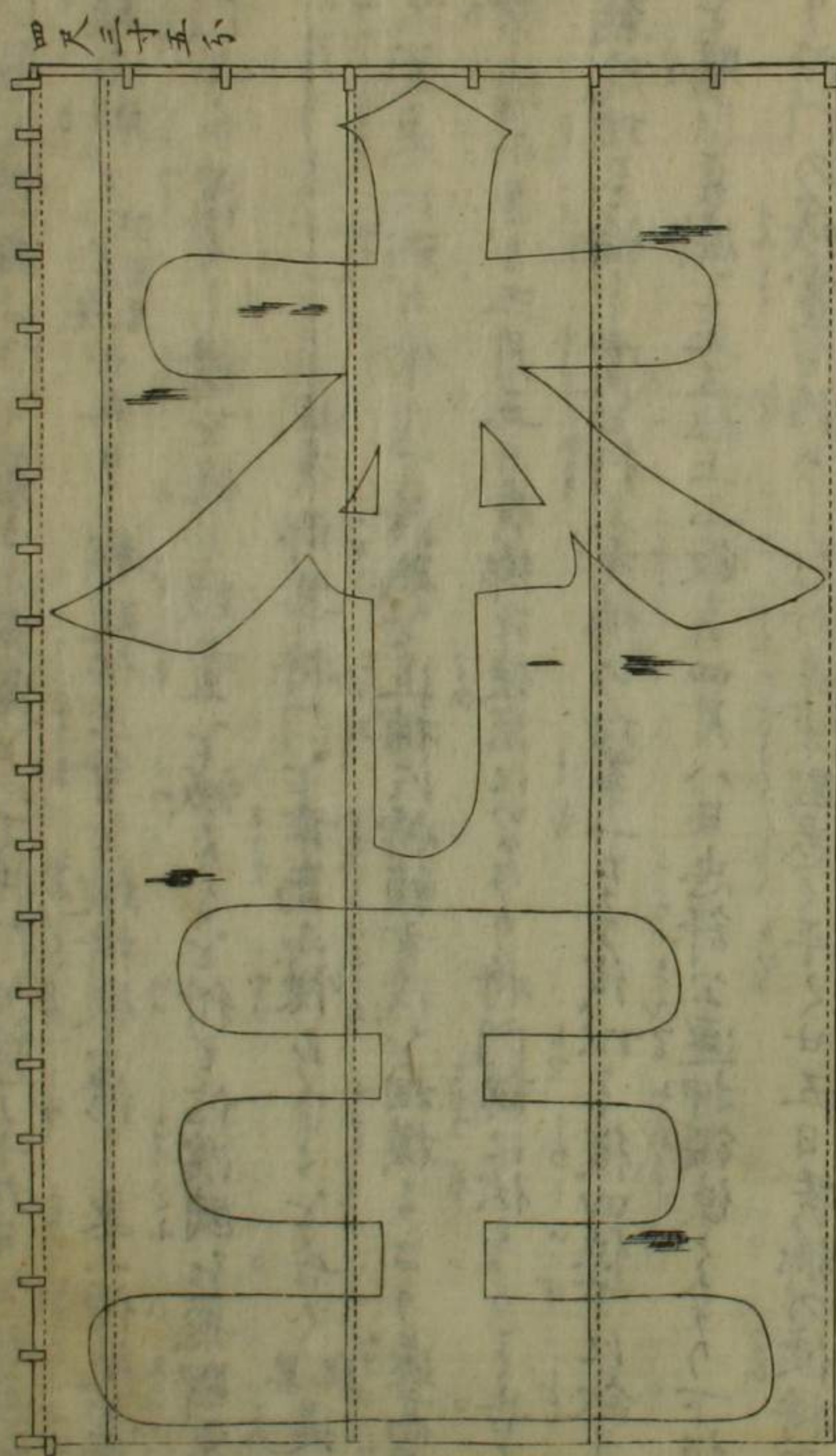
惣長一尺二寸九分

柄ノアマリ五寸五分
上下ミナ竹ナリ

結城郡尾崎村倉本氏所蔵将門旗

尾崎ハ将門記の岡崎ナリ子春丸
ハ此地の人々将門小由緒あり

絹地両面朱カキ文字白地ナリ 豎乳十八横八下一麻布ヤウナルモノ
春村云古代指物旗類皆
左乳ナリト云
七尺四寸七分



四尺三寸五分

色川三中云将門ノモノニテハナク朝廷ノ御身方ノ人ノモノナルベシ将門記ニモ本皇本天皇ナト
朱雀天皇ヲサシ記サレタリト云ク

及胡録百九十九具と獲り十五日維幾定遠常陸小歸る十六日 朝廷再
ひ符と諸國小下し募る小重賞と以て將門と討つ十九日公雅與世と上
總小斬る一代要 記紀畧 廿五日 朝廷仁王會と綾綺殿小修し更小僧徒と京城諸
門小分遣り講と修し賊黨と滅すると祈る信濃國を飛驒京師小
いなり去十三日貞盛秀郷等將門と幸島小謀するを告ぐ畧 是月忠
文閑東に到り命して餘賊と追捕し將賴玄茂と相模とさき遠高玄明と
常陸小さる三月五日秀郷を使京にいなり將門誅に伏するを告ぐ九日
朝廷功を倫賞と行ふ秀郷の功第一なる後以て後四位下に叙し功田
と賜ひ貞盛と正五位上小叙を四月八日忠舒公連押領使とかり下總小入
り將門の殘黨と治めむ於是東國悉く平く廿五日秀郷の使將門の頭
と齎らる京師小いたる將門 檢非違使と禮を大略小徇へて遂小獄門小
梟に以上諸書を参取して其要と撰む原書澤文もろもろはと傳録の 或云將門純友比磨
後眞あるさまハ今様の假字文として體面を一なり

と直下し密小逆意と相活ひとつと或貞盛京師とて將門の權及せんを察しとて是
代撃んと思ひつ終小果さるる時と終る當時の巷校街役あつと好事のもの物小
も犯したるこのとき將門純友東西小起るといふも合戦のやうと按さる小聊も謀しあ
たりとと思ふと兼平八年春二月權守與世王介源經基朝臣と足立郡司判官代武芝
と不活のよと争て事小あんと聞えり將門と經基を鎮めん為小武藏國一立越改小和
睦と結ぶと云ふも武芝の後陣故なく經基の管所と圍み經基ふく疑て争つ上落
事の趣と奏せり將門も一層の罪と申す也與世も身の罪適に思ひて頼小將門
小謀及とせりあけは將門も亦武勇とたのむとてふ小國残りよくお慮け勢に乘
りて京師も攻めんと謀りたり又云秀郷朝臣とのや將門小與せを思ひて下
總小いもとては將門追從兼忍りたり又云秀郷朝臣とのや將門小與せを思ひて下
朝臣と副て終小大功を立るといふとねつとあささる秀郷ハ世もたれたる武畧の達
人たりと人々を朝敵とすともあらざるも一果して事を両端小據りては將門と与せん
と思ふとあらん小後の軍功もたのむとては將門新皇の所為た小あささる秀郷ハ世も
ありやその為作と傳聞さるるも一やたは爲れ体と傳聞たりん小共は謀る小是れは子小
共小する小是れは子小共は謀る小是れは子小共は謀る小是れは子小共は謀る小是れは子小
官を置し時官官名をかり俗説の言なり古事談云將門逆乱者天慶三年十月始披露さ
大臣以下文武百官皆以忠空此文と見れば將門を置しハ悉く朝廷の官号を用ひたるに下
の水雲先生云藩榦相馬家條に家系將門より出り見え多しと將門ハ謀るして山伏し
めさる子孫の有るを謂ふ此ハ言弟は葦原四郎將平より出りたる也葦原信太の地方ハ
土記小葦原と他は信太ハ小太郎小因あり且將門記小將平其事の成るを先見し將
門と強諫る後將門諸弟と叙任さる小將平の名見えされ小偽命と受さるる見ゆ
人の後宗ゆきを將平より出りたる也○將門ハ岩井とて傳せられたり今其とて
國王の社あり土岩井の鎮あり朱印の地拾石と案らる八月十四日の作あり但し將

門の邊をこれし二月十四日なり月日違ふも同日あり宿官と飯塚某と稱されてのる鞍馬
 を雲地を寄つてハ厚たをみ此れと解つてつらつらなり殆ど唐山鼻亭祠と相似るも
 小く又岩井に鳴と云地あり所謂鳴度山と云ふと云ふなり此地延命寺と云ふあり
 業師如來の像と云ふを將門守尊なり云々云々。云傳ふ。柳菴信田系國小將門の年と云
 八と云ふ貞盛ハ伊達家臣秋保系畠山天元五年三月十九日
 本年七十五秀卿ハ佐野家書云々年七十六備前家書云々三月廿三日卒

○三縁山志九第九世磨蓮社道譽上人貞把和尚姓ハ大谷氏畠山の麾下

和泉國日根郡鳥取庄波宇午村の人父ハ刑部丞母ハ青木氏之永正十二亥

年九月廿八日誕生大永七亥年三月十三日十三歳して同庄寶園寺貞也

上人小投ハ羅染ハ性魯鈍して道心甚深ハ十七歳の時享祿四卯年

二月関東の高風と云ふや錫を飛ばし敵路の中と云ふのさ長亭は月と歩流

し武蔵國小下り三縁山小いたり修學せんと果譽公是と許し修學終り

行精して晝夜通教を聞て九年の星霜を経て後故郷に歸省し師の命に

よりて溝筵と云ふ其説場小をり咽して云事あたつた面色赭を刺ハ高

座より落つ聽衆觀て大少嘲り笑ふ茲小於て師小辭はる小及び再ハ

東関小いたり晝夜夜々として貫練精修ハ一朝下總國成田不動尊小詣て

懇祈せると三七日明王假寐に託し現形し両手に利鈍の二劍と掲げ示

して曰汝將小何れを呑んと云や師の云利劍を呑んと明王利劍と振

ひ師の喉と裂破ス即血と吐く事升餘して甦る然此と身に痛惱と覺

えん今龍澤山小鈍血の法衣あり成田山開帳の時小こまを結縁せしむ世小此事と祐天

精人と兼云々又漸著聞集卷五祐天傳小年十三縁山池法院に休波と師と休波此れを

愛ハ山の名匠檀道上人小付く上人其才と貴ハ遂ハ龍髮せしめて祐天と名つくと見ゆ

此ハ少年より才氣顯赫ハ多し然るに其不靈と歎き祈しと云ハ誤なり但し祐天寺

の類小此事と云傳記にも往々載る惟なる書小ハ見えれと或人ハ謂ふ祐天名ハ眞心顯

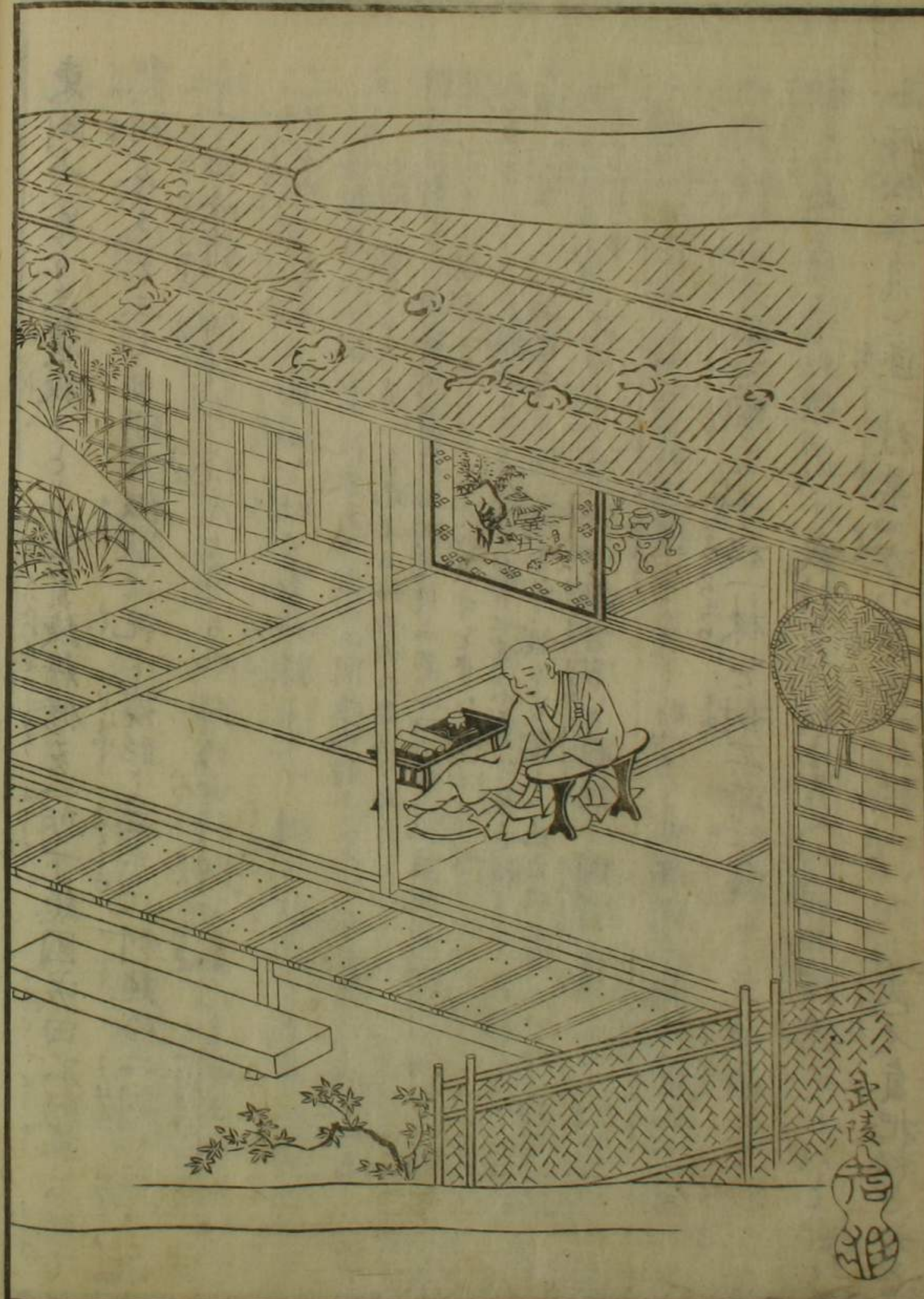
と号ハ享保三年 云々云々日々數方言と暗誦顯密小通して内外と涉閑

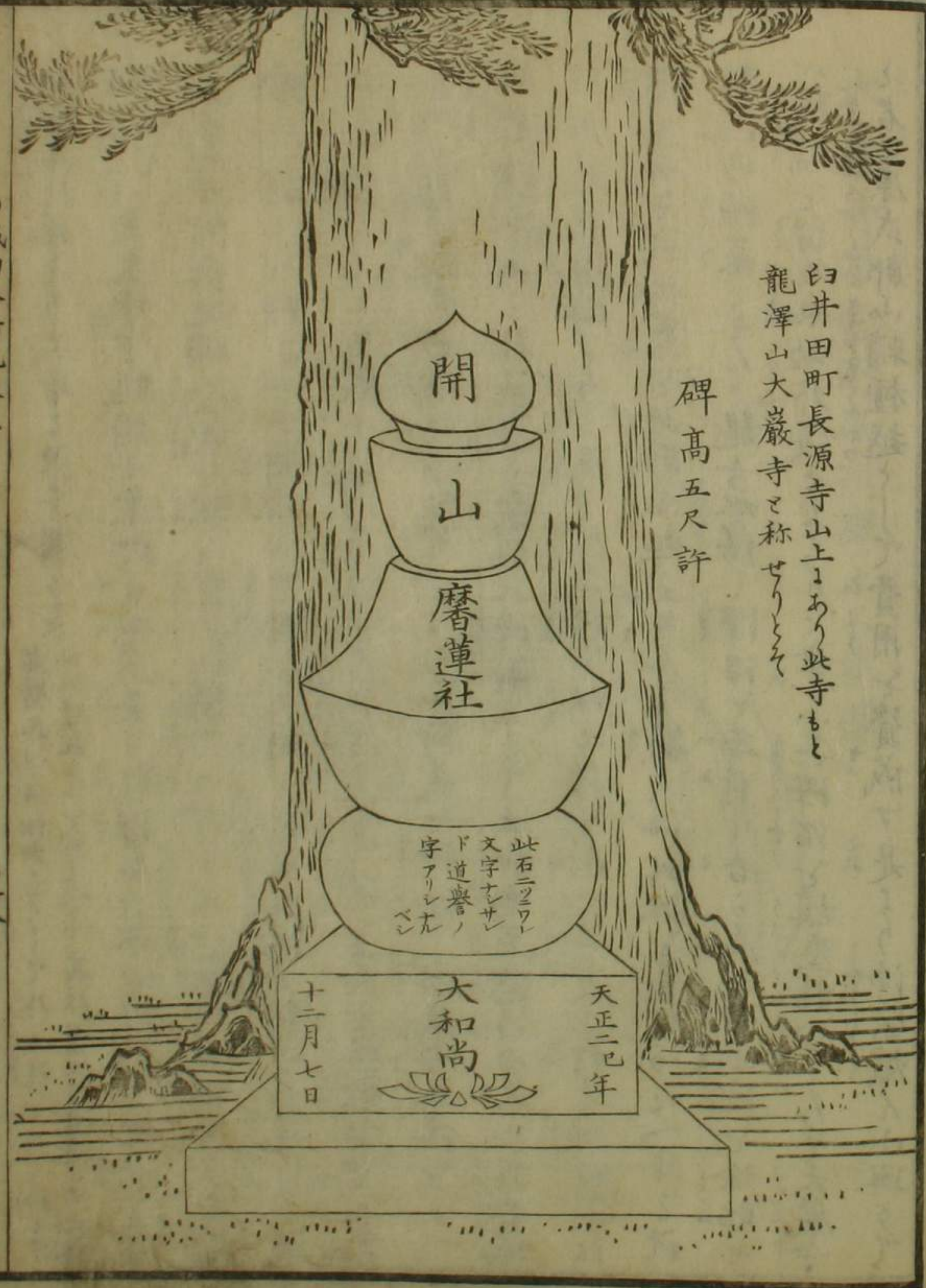
以後祖洞上人少隨ハ受法遺事ナシかつ武蔵國小机庄泉谷寺に弘化

の時杖と以て地を穿ち子松一株と樹其時誓願をらく我法もハ行運の

榮えあらは此の松栄ゆハ我法をハむハ此松栄ゆハらはと然る

小此松年月と逐て枝葉四方小布て一町餘小いたる邑人貞把松と云そ





臼井田町長源寺山上あり此寺もと
龍澤山大巖寺と称せりとす

碑高五尺許

此石ニツマレ
文字ニサレ
ト道譽ノ
字アリト
云

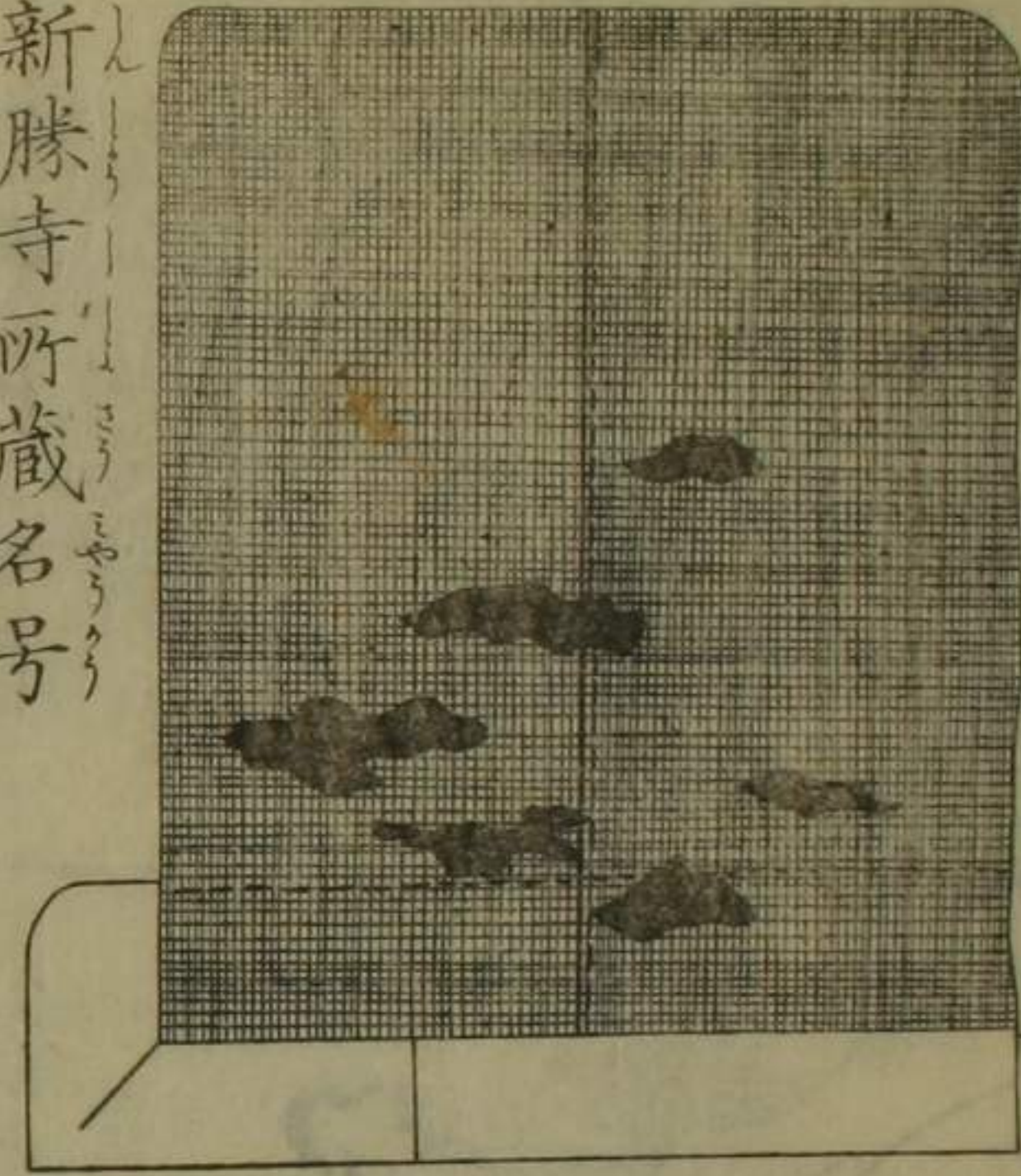
天正二年
十二月七日
大和尚

南無阿弥陀仏道譽衣

ノ四目

新勝寺所蔵名号

一尺九寸一分

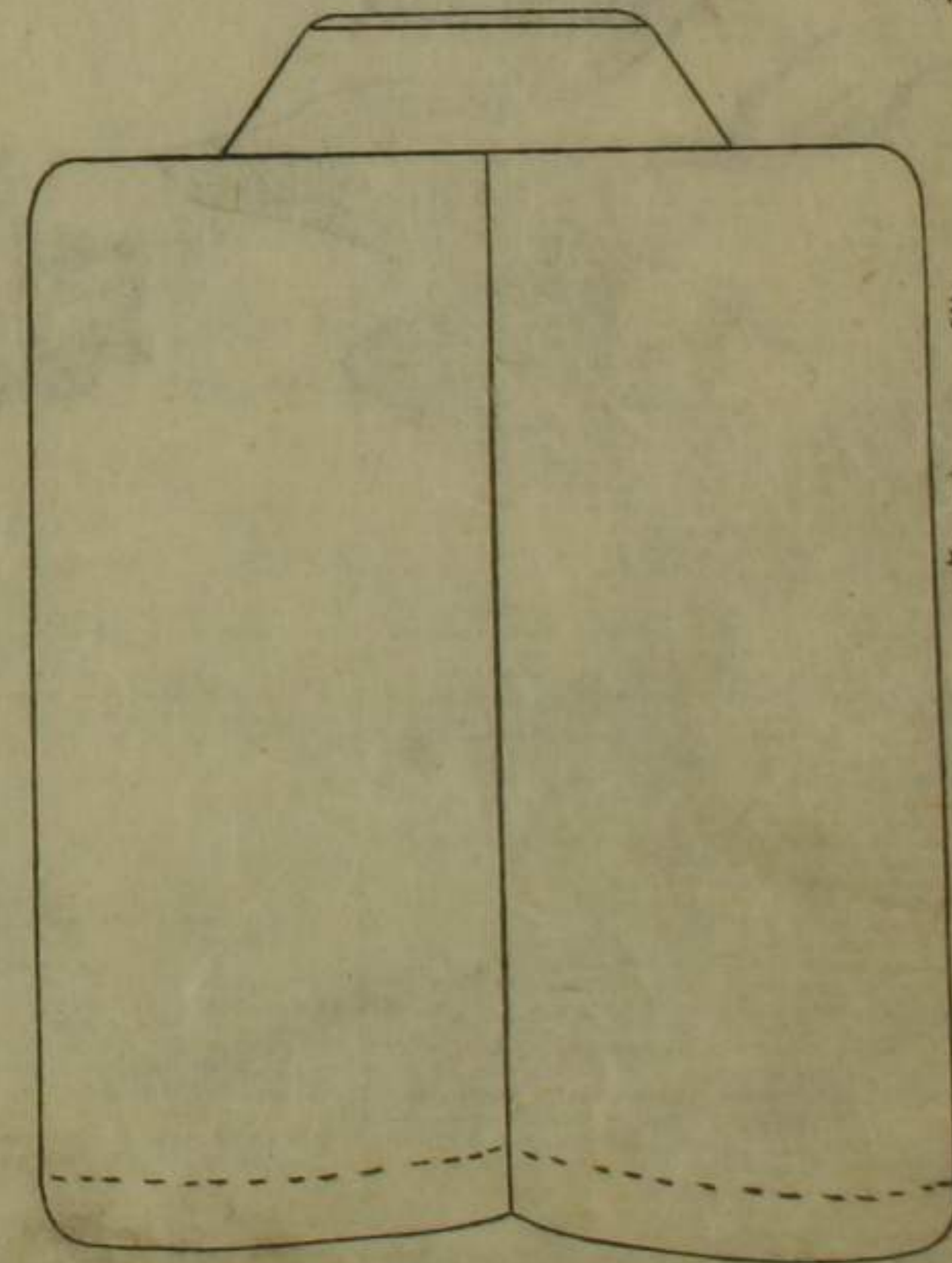


大巖寺所蔵道譽上人遺衣

俗ニ鈍血ノ衣ト云

同常服

絹色紫



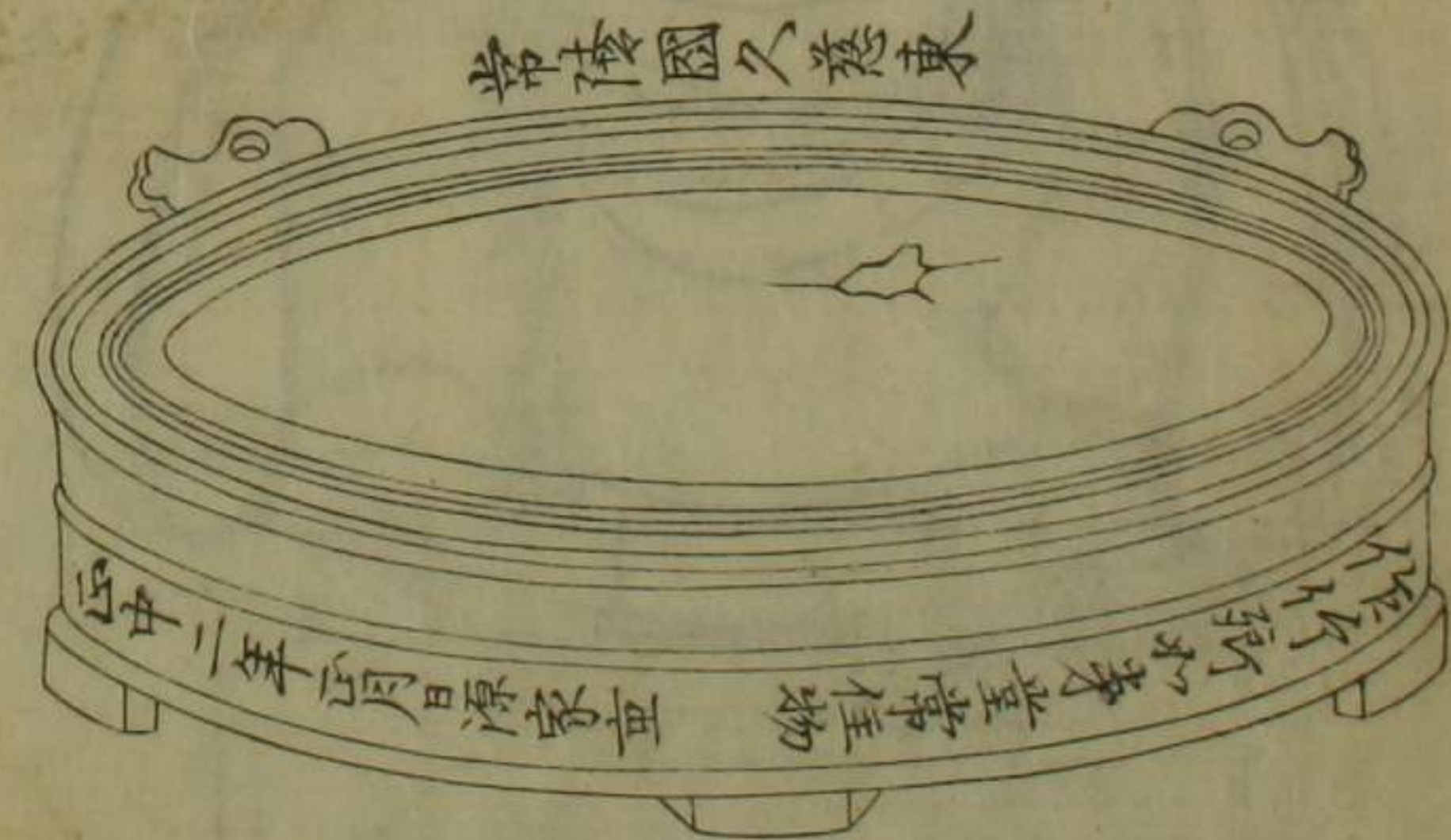
の下毎に風あり人皆これ異室曆年中此松由多く作らばと云ふ其後者寺火災して大殿
 庫裏焼燼天文下總國千葉郡生實山龍澤山水中に入り座念と
 と三七日阿弥陀佛金光と放ち空中に現てつゞに一家の玄願とつ
 給ふこれより師を以て傳法中興と時小龍神此瑞小驚出現して此
 小住とこと數千歳とたつつ此と寺遇と見伏願上人大悲
 と以て浄家妙音とさつけつ師是と許諾宗戒の二法とつ
 け龍澤善女と稱善女受戒此禮謝と云和尚哀愍のゆえ小我昔城
 と出慈恩湧漸より深正何と以これと謝せん是小於師龍女に
 謂て云此伽藍と此所小起立せんと欲以此地と家に何たと云此
 弘法の洪基とせんと龍女承諾し澤沼と委付し吾ら為小堂小池と除貽せ
 殘軀と留め永劫外護とならんと聿小其澤沼と填壅精舍とたて大嚴寺と
 と名原式部少輔檀越とて費用と資成す是より浄宗煽ん小興りて

大嚴寺本堂所安道譽上人木像



同寺所藏道譽上人鉢

源家重何人ナリヤ詳カナラス



東慈久國隆

源家重何人ナリヤ詳カナラス

義虎六七百群（せんりゅう）後（ご）今猶小瀦あり尋常水（よつこ）池（いけ）の半小湛（たみ）元毎年（よつねん）加行（かぎょう）傳法（でんぽう）中
 八靈水池上小湧騰（はつれいすい）事三尺餘（こと）加行終（かぎょう）後（ご）又平日（あつね）能（よ）是（これ）龍女新受（りゆうにょ）
 法（ほふ）能（よ）徒（と）小供（こけ）多（た）なり平日（あつね）師（し）祥（しやう）名（な）尤多（よ）池水（いけ）と掬（く）て呪（のろ）て燈油（とう）と文（ぶん）
 念佛（ねんぶつ）小障（せうしやう）ととらひ群蛙（ぐんわ）喧嘩（けんか）と止め（と）む弘治（こうじ）元卯年（げんう）七月（しちがつ）鹽書（しんしよ）と文（ぶん）
 啓上人（けいじやう）小承襲（せうじやく）縁山（えんざん）第九世（くじゅうせい）となり永福（えいふく）六亥年（ろくがいねん）又生實（おひま）小歸位（せうきゐ）當國（たうこく）
 白井村（しらいむら）小多（せうた）り長源寺（ちやうげんじ）と創立（せうりつ）幽居（ゆうき）亥天正（がいてんてい）二戌年（にじゆねん）十二月（じふにがつ）高僧（かうそう）傳（でん）七日（にち）
 西小向（さいせう）合掌（がっしやう）佛（ぶつ）來迎（らいぎやう）と感（かん）て寤滅（ぶめつ）亥世（がいせい）壽（じゆ）六十法（ほふ）臘（らつ）四十八遺骸（いはい）
 と龍澤山（りゆうさく）小場（せうば）葬（まう）は

- 二王門 本堂 經藏
- 三重塔 御供水所 鐘樓
- 御手洗井 寶庫
- 本坊 遍照院 南光坊

正福院

延命院

本尊地藏あり元臺ありて兼師の別當と勤め日蔭山と稱せり

奥院

不動の本地大日ふり元本堂の後北方ありてを今此地に移し金剛胎藏西界に銅像を勧請し毎年六月八日小戸を開て奉詣り許す

額堂

石鳥居

光明堂

大師堂

観音堂

又院とも称す今の飯田屋駿河屋裏屋より居地甚旧址とてり

阿弥陀堂

堂内古より十王あり今新本堂をほしたる也

薬師堂

地主妙見社

白山社

秋葉社

金毘羅社

疱瘡神社

清瀧權現社 相殿妙見社

辨財天社

聖天社

天神社

浅間社

稻荷社

三宮

成田村と郷部村との間あり祭礼毎歳六月十七日

社蔵小古面あり祠官と宮崎某とて此社の本地佛の兼師八座像より巨偉なり此堂も郷分ふありと成田へ移し其後今此地へ移せり○三の宮薬師不動三尊の備社あり此講中の帳へ至て古き物多りと云未だ見ん

天神社 牛天神と称せり古き勧請と見えたり

此も地名と牛作

仁王門所掲

本因寺

東寺別當華嚴院長兼門主大僧正道如書

本坊所掲

神没新猿寺

前智積僧蓮藏書

額堂所掲

鐘識

奉建立成田山不動尊前空鐘之章

天長地久御願圓滿

伽藍安穩佛法增長

庄内无章国土安全

○成田森請記卷五

文政九年丙戌九月深川平清

○三十一



文飛筆画

和中敏昌乃民牧樂
 十方且那現末忌地
 神讚新勝寺
 二時寛永十年辛酉九月廿八日
 住侶法印照禪
 大工頼澤形部太丈信業

本堂前銅燈
 籠識
 照範住持
 時諸堂再
 建當寺中
 真上享保
 九年十月十
 九日寐ス

伽藍安穩
 人法繁昌
 正徳六丙大
 不動明王御寶前
 二月二十八日
 國家安泰
 萬民豊饒

願成甲申興
 銅燈龍一基
 現住沙門照範

○周文羅漢圖

豎三尺七寸
 横一尺九寸

某氏寄附

○小鳥丸太刀

麻布坂下町

柏屋重次郎寄附

○牧溪画二幅

植生郡

某氏寄附

○神寶天國此寶劍當寺第一の靈寶之先小舉たる平将門調伏の事を朱
 雀天皇より賜ふと云傳たれと容易なることを許され洩しつ
 その外猶種々の佛像靈寶古書画お數多け社と限りもなけ社ハ其一
 二と舉ぐ

寶永中稻葉侯ヨリ所寄

稻荷木像惣長八寸許

此時寺領五十石と寄附せし
 今も稻葉侯より
 年々代参の使者
 あり



石燈識

宝永元甲申年九月吉日

稻葉四郎左衛門尉越智宿祢義通
 稻葉大右衛門尉越智宿祢長通

○成田泰詰記卷五

仙石氏所寄古胴圖
せんごくしう
こどうぐらふ
 幅 七寸五分
 堅 八寸八分

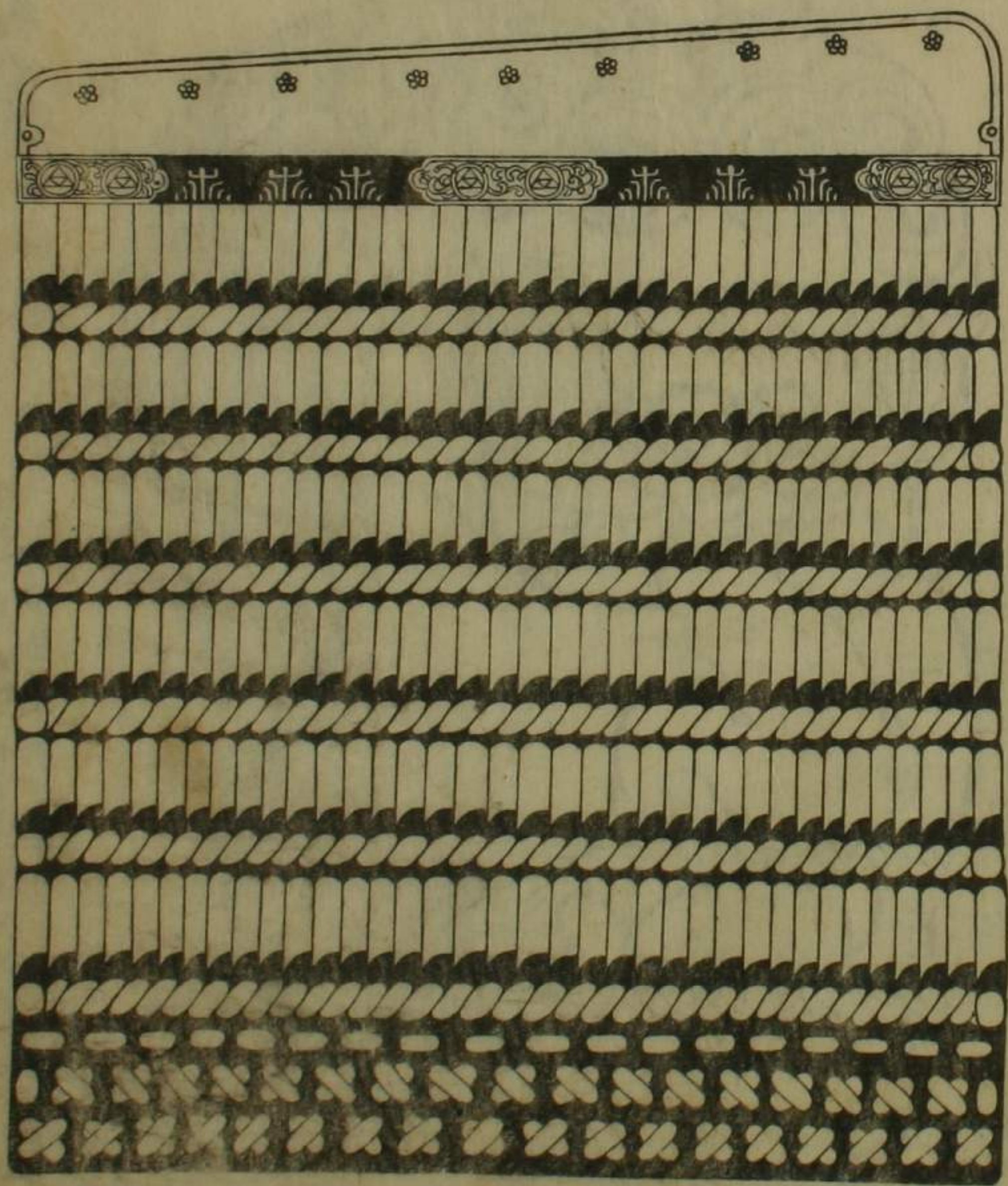
裏 為義十
 面 二男
 如 賀茂
 識 冠者
 リア 義次



奉寄進成田山不動尊寶前為
 御武運長久天下泰平也
 仙石氏
 政長
 未載六月廿日

諸家大系圖卷四清和系圖為義十二男二義嗣アリ武家評林大系圖義次
 淡路國ニテ戦死ストアリ

同袖 堅一尺二寸
 幅一尺五寸



某氏所寄不動古面

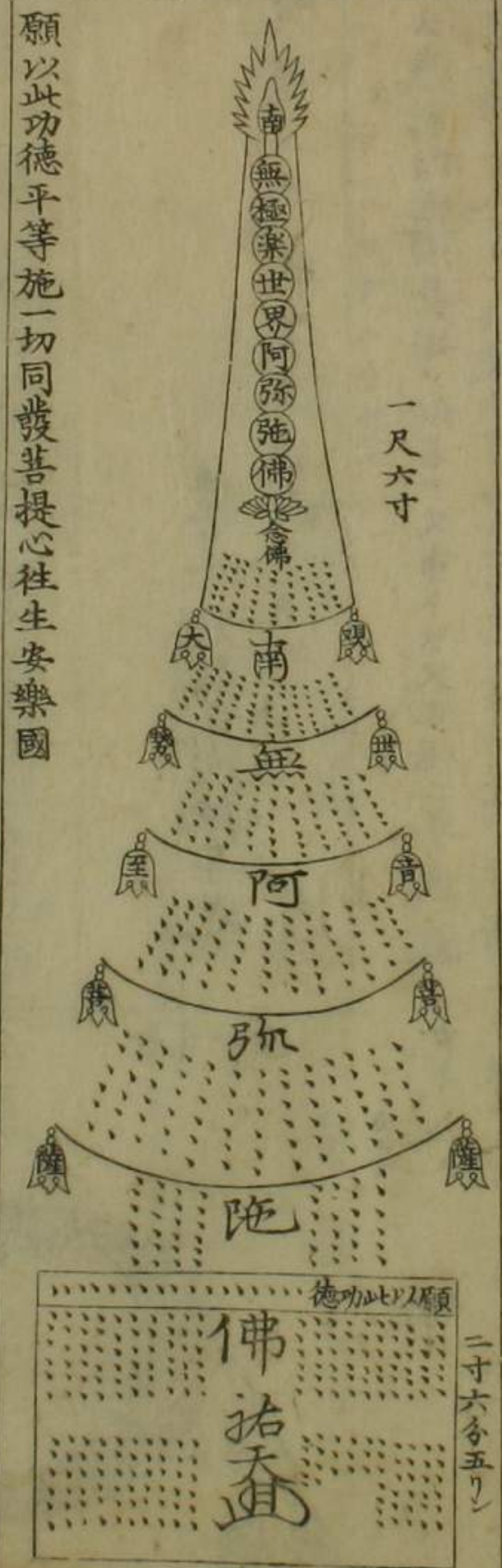
長八寸六分
横六寸二分

歌迦不動面有り假面譜ニ元休満総ト云
人アリ宝曆八年死スト此人ニヤ



細点原書六字名号ナリ

祐天百人遍名号



願以此功德平等施一切同護菩提心往生安樂國

此歌圓光大師傳記ノ中ニ見エサレトモ玉林和歌集卷三ニ載テ如来源空上人ニ
告サセ玉ヒケルトナント了譽法師ノ後書ニ見エタリ

圓光大師
不焚名号
真図

只タ板ノコロツノ罪ワ深ク氏
南無阿弥陀佛源空五
ワカ本 札ノアラン 記リハ

おほしり
大石氏所寄念珠箱識

武藏北野郷大石源左門ト云家アリ天文比ノ文書アリ此家ヨリ寄セシヤ
此家ハ木曾義仲手孫ニテ大石源三氏照其養子トナルト云

弘法大師御作摸

籠數珠 一連

奉寄附竹珠念珠一連

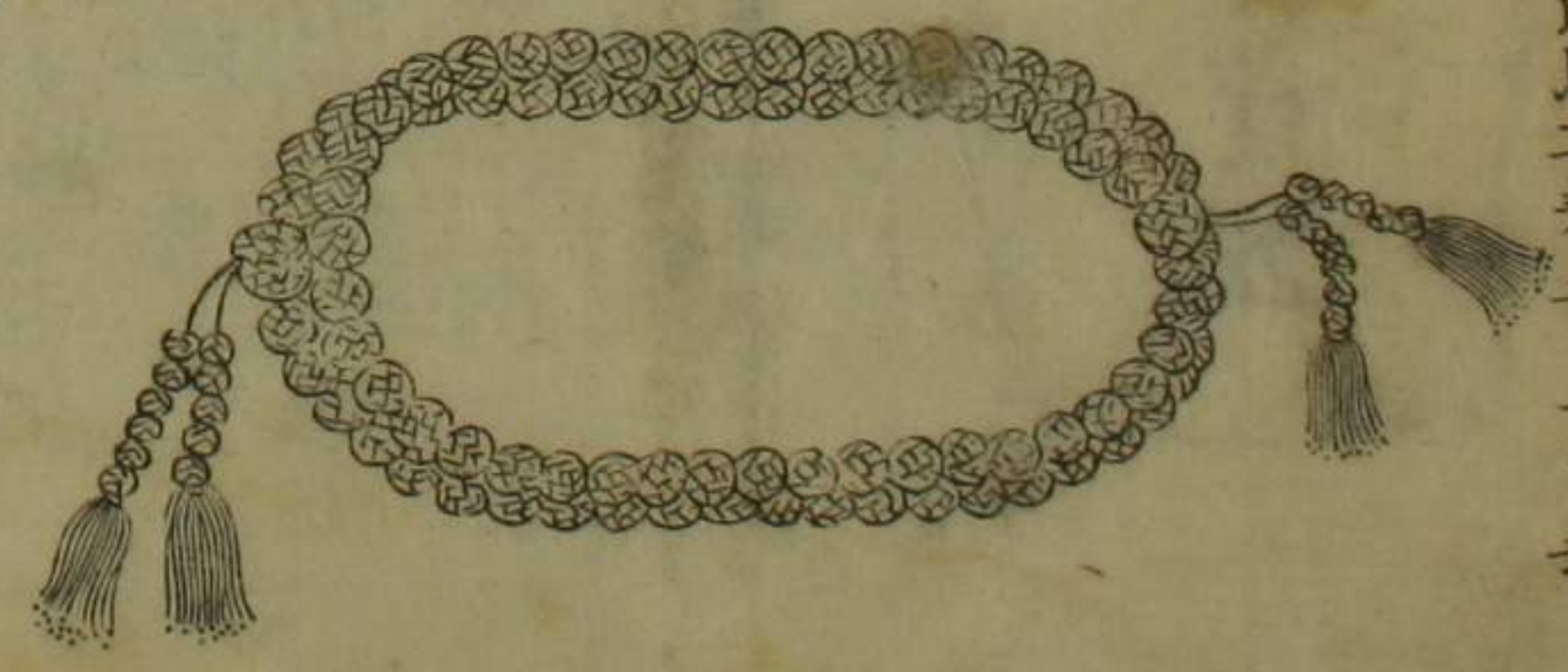
爲紅月圓翁居士出離生死也

元禄十五年 孝子大石又内施与之
午天五月廿八日

七寸八分五ノ

或云浅野内匠頭長矩ノ幼名ヲ又市ト云又正保二年武鑑ノカキ入ニ
大石喜内ト云入リト此彼ナシアルヤウナトモ此又内ト云ノ何人ニヤ詳ナラス

目ヤリ



笙



管ノ識 便于遊則懷之形様雖異非好奇也自 名一世
便于遊則懷之形様雖異非好奇也自 名一世

享保十四年九月吉且谷正穩造

九鼻丸箱小題セリ長一尺三寸二分徑八分



古碑の圖

奥院の額字覺皇と大日とつり

建武三年二月廿九日
延元ト改元アリ

此碑奥の院に
石垣となり有
左の方入口小立り
道祥何人なりや
考へば外左の方
ハあり文字よ
むへも知れ
もあり



水雲先生云延元元年五月ハ高氏兵庫に戦て楠正成戦死の月なりハ月廿六日
より推せ百ヶ日前ハ五月十四日に死せ一人と見ゆ行ハも其時の戦ハあらざる

延元の号を用ハ南朝忠臣の後ふこと輕ふ
倭川合戦ハ梅松論太平記共ハ五月廿五日ハ又太平記五月十五六日の
ころ備中福山大江田武部大輔氏經直義と合戦以櫻雲記五月八日顯家政那須云

此奥院右の方あり



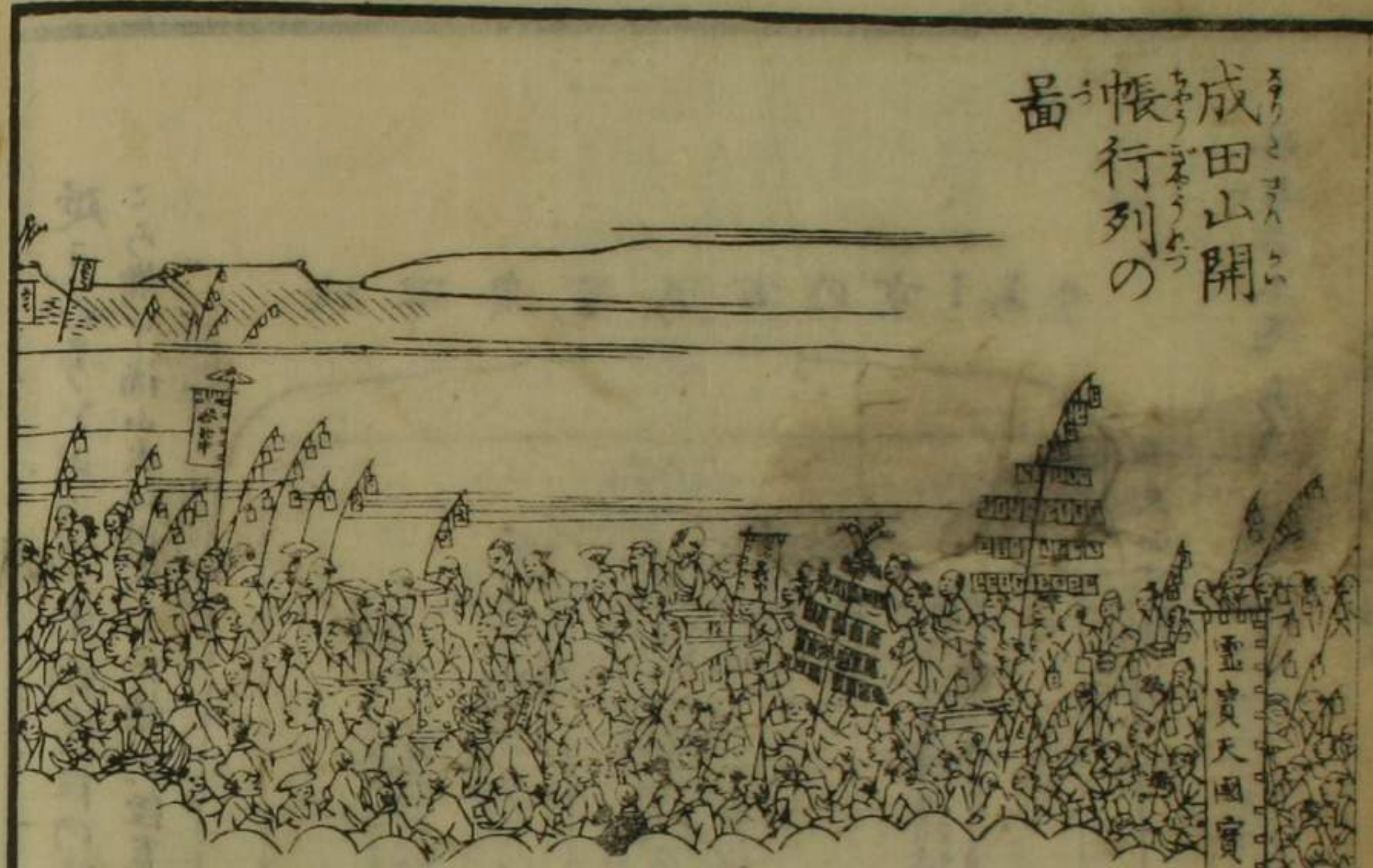


開帳寶曆元年
平井燈明寺。同主
深川永代寺。宝永
二年。寛政元年
。文化三年。同十年
。文政四年。天保
四年。同十三年。
安政三年共永代寺

二童子

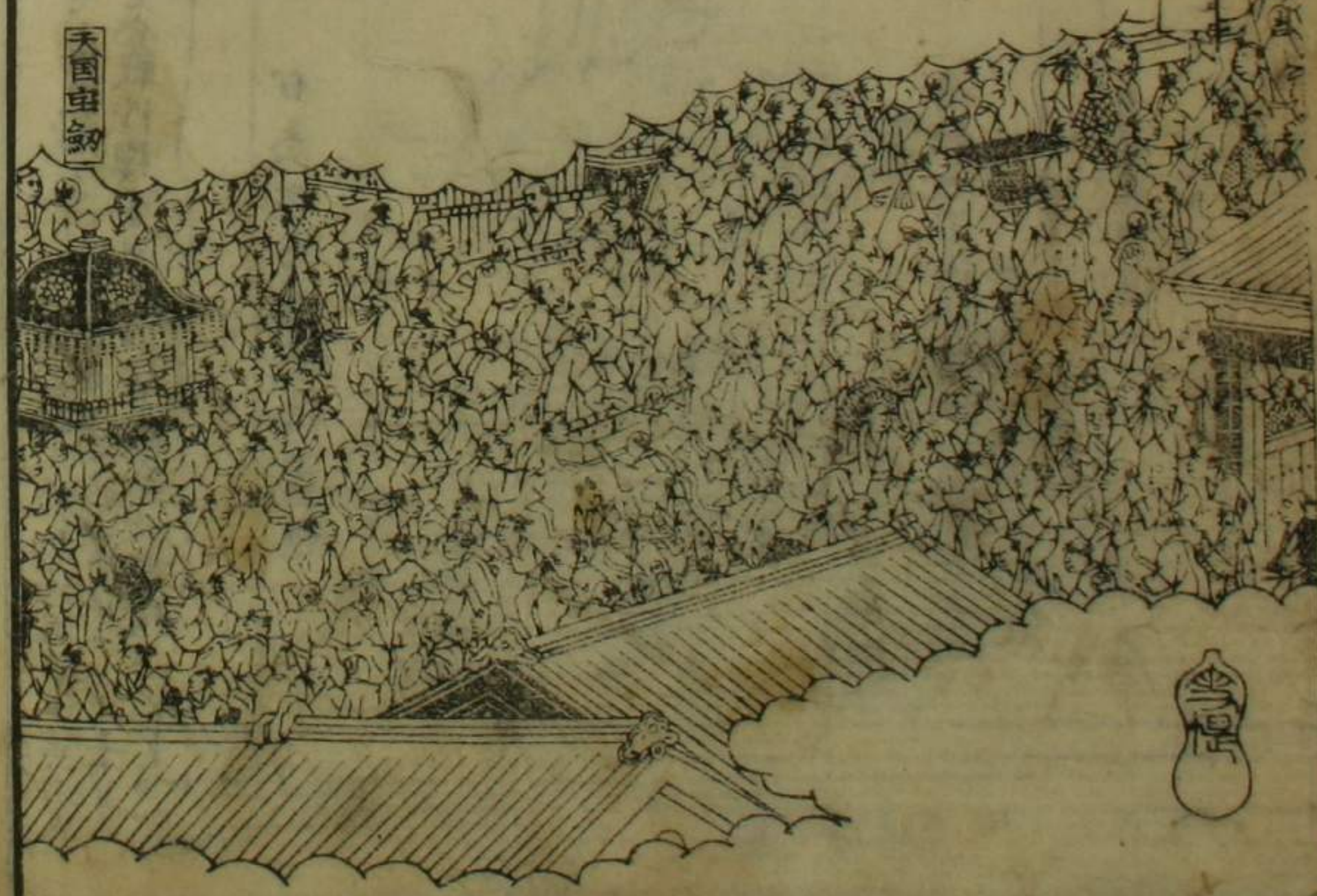


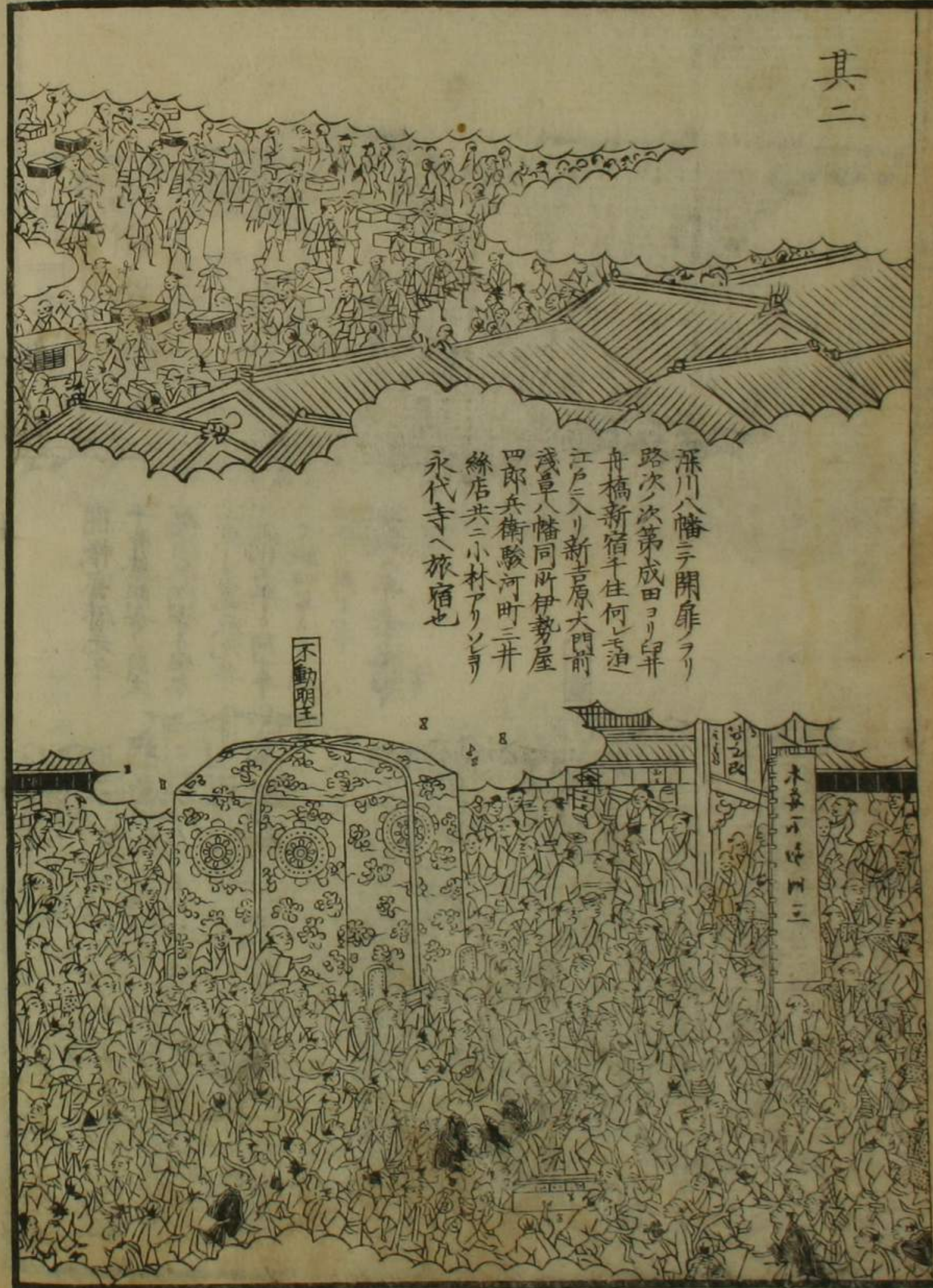
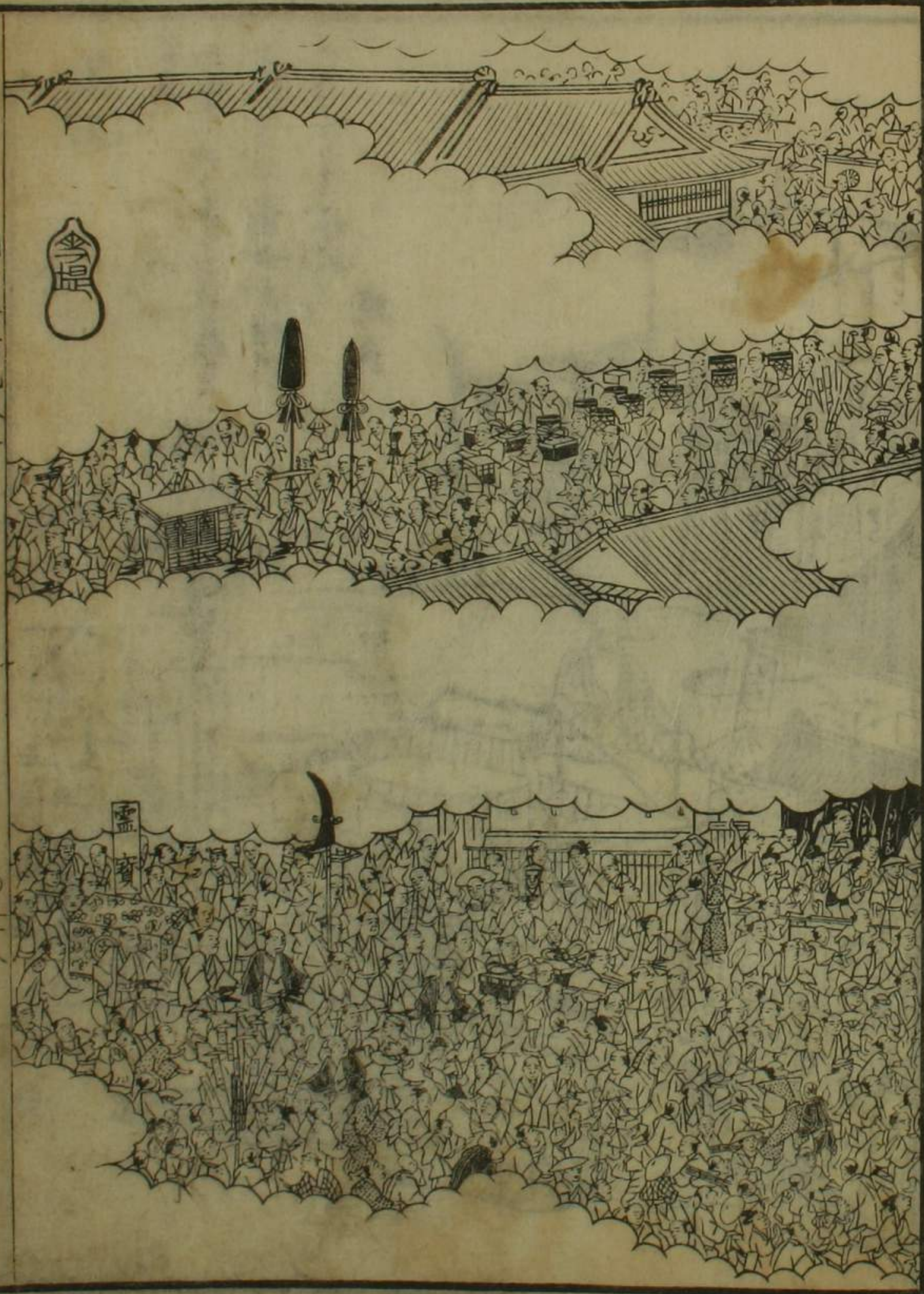
成田山開帳行列の畵



天國虫劔

天國虫劔





深川八幡ヲ開扉ラリ
 路次次第成田ヨリ早
 舟橋新宿十住何レ道
 江戸入り新喜原大開前
 浅草八幡同所伊勢屋
 四郎兵衛駿河町三井
 絲店共ニ小林アリソナ
 永代寺へ旅宿也

不動明王

木五ノ門州三



其三

家集

むすのくさるお花を
層つゝの愛女く袖の
いろよこそみれ

建彦





○手長ハ伊能穎則云江次第二大臣大饗条居餽餽朱器云大納言中納言參

議辯等手長隨位階用地下五位尊者主人手長云羞立作物主人並尊者

陪膳役送辨或殿上四位大納言陪膳等或用殿上五位或大中納言以下手長後

送用地下五位ト見ゆ大臣大饗ハ大臣小任セラシム人公卿と我邸小招テ饗を

行ふナリ餽餽ハ菓子ナリ手長トハ今の給仕人ト云クト大納言云ハ大臣

の爲小手長トツトめラシムナリ隨位階ハ饗を行ク大臣位階卑々此を

地下五位と手長小つククナリ尊者トハ招客の中小官位共小高き年膺

の人と云ヘリ今ハ上客ナリ其給仕ハ亭主自らシトめラシムク羞立作物ハ

魚菜ハ料理ナリ陪膳役送ハ料理ト盛礼ハ盃皿と席上まで待運ヒ膳を

居ラシメテの役ナリ手長ハ飯汁ト威替テ進ル給仕人ト陪膳トハ別ナリ大納

言ハ陪膳殿上五位ナリハ手長トツトめラシム地下五位ナリハ手長トツト

兼ツトむるナリ是今の沛手長ハ濫觴ナリト云リ

小野忠明墓寺臺村永興寺域中貞享年中鐘識小寺臺郷保目山永興寺にあり忠明即神子上典膳ナリト云

○武藝小傳小神子上典膳其先伊勢人也仕上總萬喜城主土岐頼定弱

冠好刀槍術會伊豆人伊藤景久一刀齋到上總典膳遂從遊諸國景久弟

子有善鬼者亦得精妙然景久常欲害之謂典膳曰汝殺善鬼然我恐汝

不勝因授其靈刀誘善鬼到總州相馬郡小金原近邊景久謂二人曰我

自少好此術遍遊諸州無勝我者吾願足矣今欲以寶剖瓶刀授汝等然

一刀不可授二人汝等試優劣於此優者我與之善鬼大喜与典膳決勝

負典膳遂殺善鬼景久以寶剖瓶刀與典膳而去相馬郡善鬼塚今猶存

爲世人呼曰善鬼松典膳後仕幕府慶長五年戰於信濃真田有七槍

之譽後冒外祖氏称小野二郎右衛門食三百石今濱町小野氏 高八百石

小野忠明夫妻木像 永興寺所安

丈一尺三寸許

同寺小野氏の墓碣小清海院
 日岸居士寛文五乙巳年十二月
 六日了右側先祖大和國之城
 主十市兵部頭末孫子忠明公
 二代俗小野次郎左衛門左側右
 金五名忠常公之五也慈芥月岸
 尊靈様大菩薩施主同名次郎
 右衛門尉忠
 清岸院妙達靈寛永五戊辰
 十二月七日
 外小古碑四基あり文字なげ
 此ハ詳なり



小野氏



麻賀多神社

公津基方村

西所小祭祀

一八稷山

元ハ粟山ナリ
地名小稷ナリ云字

と用ふる中稀なり後人さうまらふ改しな多庵一公津ハ神津ナリ承暦三年うらと基方下方飯
 舟瀬舟瀬飯仲と五箇村小分此後公津新田と云村出来て今ハ六箇村となり
 一ハ瀧津宮と云 柳宮ナリ此 船方村手黒と云地あり 此地より千 麻賀多明
 神と称す 佐倉の城下酒井大蛇村其外 神名帳小印幡郡一座小麻賀多神社と
 十八社ありと云此神と移し祭祀り 應神天皇廿印幡國造伊都許利命の時稷産
 此神の事なり社の傳ハ 應神天皇廿印幡國造伊都許利命の時稷産
 靈神と稷山小祭稷日靈尊と瀧津社小祀祀りと云 一説ハ伊弉諾尊伊弉册
 殿ありと云へり 尊天照大神稷産灵命合

○神名帳考證土代

伴信友著

麻賀多神社ハ姓氏録小豊城入彦命六世孫下毛

野君奈良弟真若君

あり麻賀多ハ真若田ナリ云々此説を助て云々

祭神ハ稚産灵命

ナリトハ真若田訛れ云々 伊能頼則曰此説恐らくハ非ナリ人
 稚産灵ハワタムスニ真若田ハマワカタカレハ

甚遠くいふハいふやうに左記ハあり又真若田ハ社号の義と云々 祭神小
 及ハる小あり祭神ハ今詳ナリと得べしハ正はるく曰ふやうナリ
 稷山社に攝社五座あり印幡國造社幸灵社馬来田郎女社稷田社天日津久

社瀛津社小攝社三座あり賀志波比賣社阿須波社八代福荷社すこ被
社と云ある瀛織津比賣神氣吹戸主神逸開津姫神佐須良比咩神と合祭す
といふ瀛津社又内津社とも云是ハ伊都許利命の都あり社と云なる

伊都許利命墓船方村手黒山此傍小あり周圍一町許高二丈許小山此如し
塚上小祠あり金毘羅と祭れり南の方小少あり所あり石櫛の小口

見ゆ同所此山船塚と云塚あり船塚ハ船方塚此省なり此村の石

起る所なり是亦國造此墓なり塚上小祠あり稻荷と祭れり

二月七日八月十六日此神事あり祠官と太田出雲と云其方村小太田と云字あり
此云此地名より出たる苗字

此家小乾元中此文書あり磯邊昌言此碑小見え貞治永正間の官幣
祝文等ある由佐倉風土記不載を此閣齋派の神道者不と後不偽造也

しと此尺ゆ此ハ此徴とはならずと或りり

○此家小乾元中此文書あり磯邊昌言此碑小見え貞治永正間の官幣祝文等ある由佐倉風土記不載を此閣齋派の神道者不と後不偽造也しと此尺ゆハ此徴とはならずと或りり

此碑伊都許利命の墓上小建す此も例の晴齋派の神道者の説を形した
と是らされ古きものなり載せしなり

伊都許利命墓

總之下州印波郡稷山之良三百弓瀛宮之良二十弓有巨壙為伊都許利命墓
墓安祠于上而配享二神已千有余載也謹按命者神八井耳命之八世而仕
應神帝為印波國造載于舊事本紀其祭雜產矣為國社祭雜日靈為瀛宮乃見
於社司從三位藤家清乾元中所記為以德容功業為名是上世之礼也伊都
即五土之數許利即凝金之質併土金為敬之義而至道存焉為民建社以垂治
統則其德功亦可知也已家清十八葉孫正六位屋玄追崇建碑請銘曰
稷山之良 瀛宮之良 地當龍岡 懸殊迥道 維神維安 蘋蘩時獻
為鎮為守 德輝何遜 五凝示敬 百代凱愿 典邦共長 山環海漚
元文二年冬十一月 山州淀府行軍使磯邊昌言謹撰

○昔八祭田七區ありて七家の祠官より分領せり七區とハ油免薦布免穂掛
免園子免神酒免津齋免巫免木此地天慶中將門の一亂不収公セラレ此
免三年より除地よりありて一が是歳より

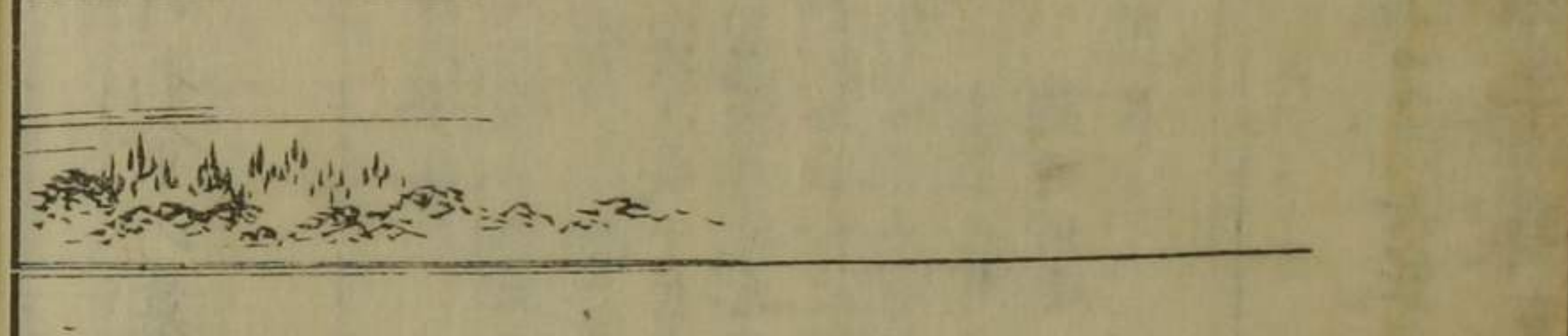
文禄中井田
 文書ニヨレハ
 八日市場ヨリ
 神津へ馬ヲテ
 神津ヨリ関宿
 へ船ニテ是國
 初運送ノ次
 第ナリ



○成田系諸記卷五

○四十三

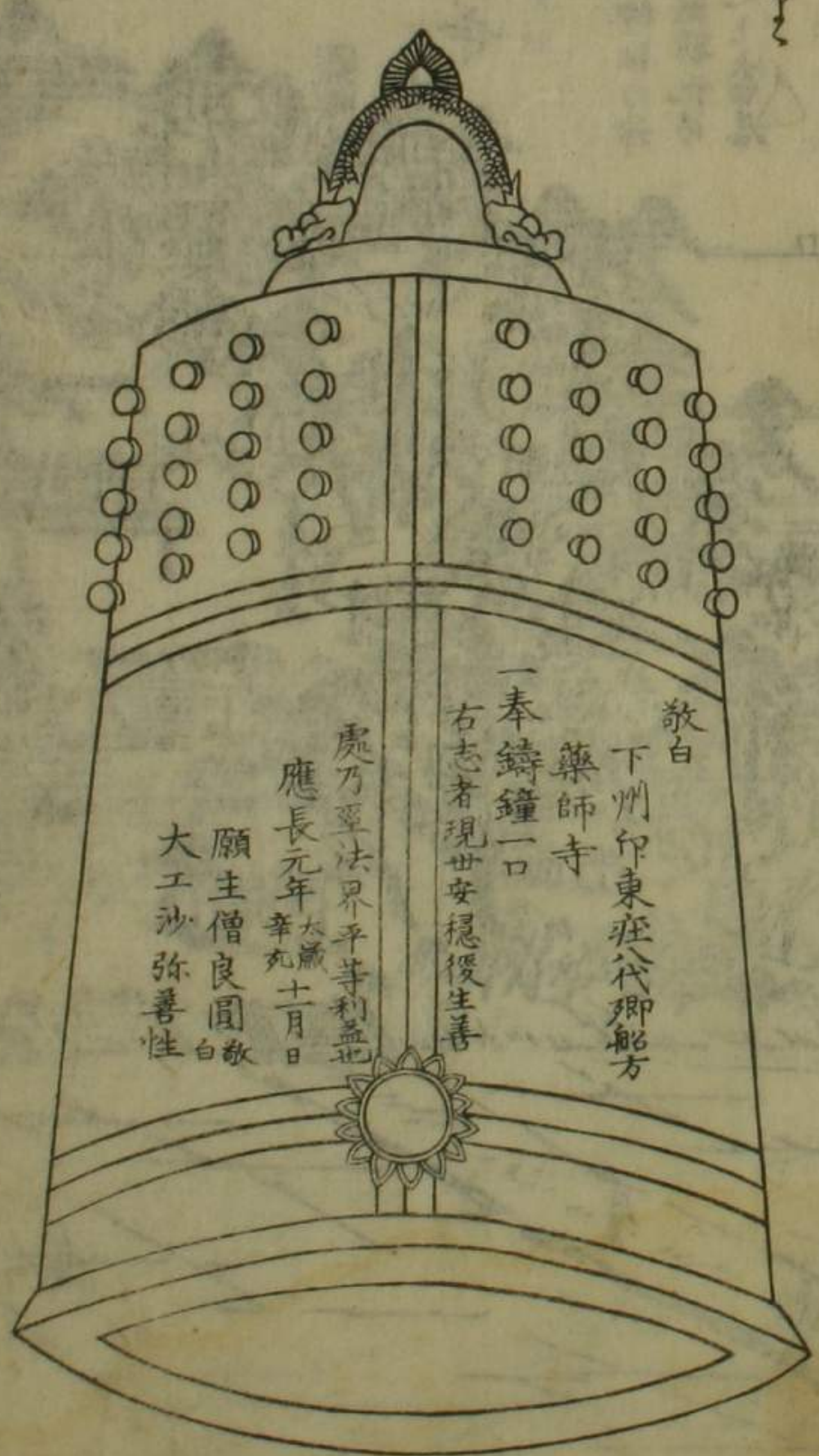
麻賀多
 神社圖
 千葉貞胤
 一碑八起林
 寺域中ニテ



繩入と云ふ
此地小七臺七井あり七臺とハ説經臺北野臺元松臺平松臺天神
臺庄司殿臺木なり七井とハ花井初井北井南井御手洗井大井椿井等
なや
庄司殿臺ハ元東鑑成就院の庄司の居アリ地ヲ花輪ハ埴物と造リ
地ヲ云フ此地名顯たス所ハ必ア有ル心つくヘキ也

○印播郡ハ郡中稲葉村よりたほとセ一各なり
田國雜記標注小印播郡イハト
國ハ以奈ハ遠江國引佐郷ハ伊奈佐ト訓注アルト皆イニ用タリ伊勢國印弁郡モ為奈格
トアリ是モ井シラ井ナニ用ヒタリ此例ニテ印播モイナハナリ疑ナシソライナホト訛レルナリバトホトハ
通音ナレハ轉ンタル例多シ云々○播の字三代實録延喜式和名抄
共小幡ト作り万葉和歌集常陸風土記ハ皆波ト作ル
和名類聚抄小郷名十
と載レハ代ハ代村印播ハ稲葉村言美
與清イニ信友
ハ賀美の訛なり
所ハ賀美郷あり賀美ハ今ハ神村とヤ三宅ハ小葉郡宮木村と云ハ長限ハ
長熊村島矢ハ
活島鳥
鳥香の訛なり
東鑑小得江と云苗字の人見え取
香村の傍小駒井野村あり昔ハ郡
司の居し地トて馭家もありしと見え
吉高ハ吉高村船穂ハ舟尾村日理ハたりと
○後紀高矢の馭もト云ナクハ
訓を祀ハ巨理ト訛る今ハ馬渡村と云ハ村神ハ村上村別ハ餘戸と載レ餘
戸ハ千葉郡天戸村と云ハ
鳥天美葉菜小等夜の野爾云々歌あり略解小和名抄
下總印播郡島矢郷ありてことハの程考ル

舟形山藥師寺船方村小あり本尊藥師如來
行基菩薩の
開基詳ならず此
寺旗曼多羅と云古三板本を蔵レ古色掬と云ハ
應長元年所鑄の鳧
鐘一口あり



或云善性ハ常陸人ニテ當時ノ良工ト見ユ那珂郡檜沢万福寺佐竹義長
寄附曆應二年ノ鐘ニモ大工穴戸嶋井善性トアリ



ふらふらの海に
うけをわきまて
すくもあけいあはれ
をこそこれ
道真准后



ふらふらやくし
の菑
此、麻賀多神社の神
宮寺として四國雜記の
稲穂別當と太田屋
教の説なり

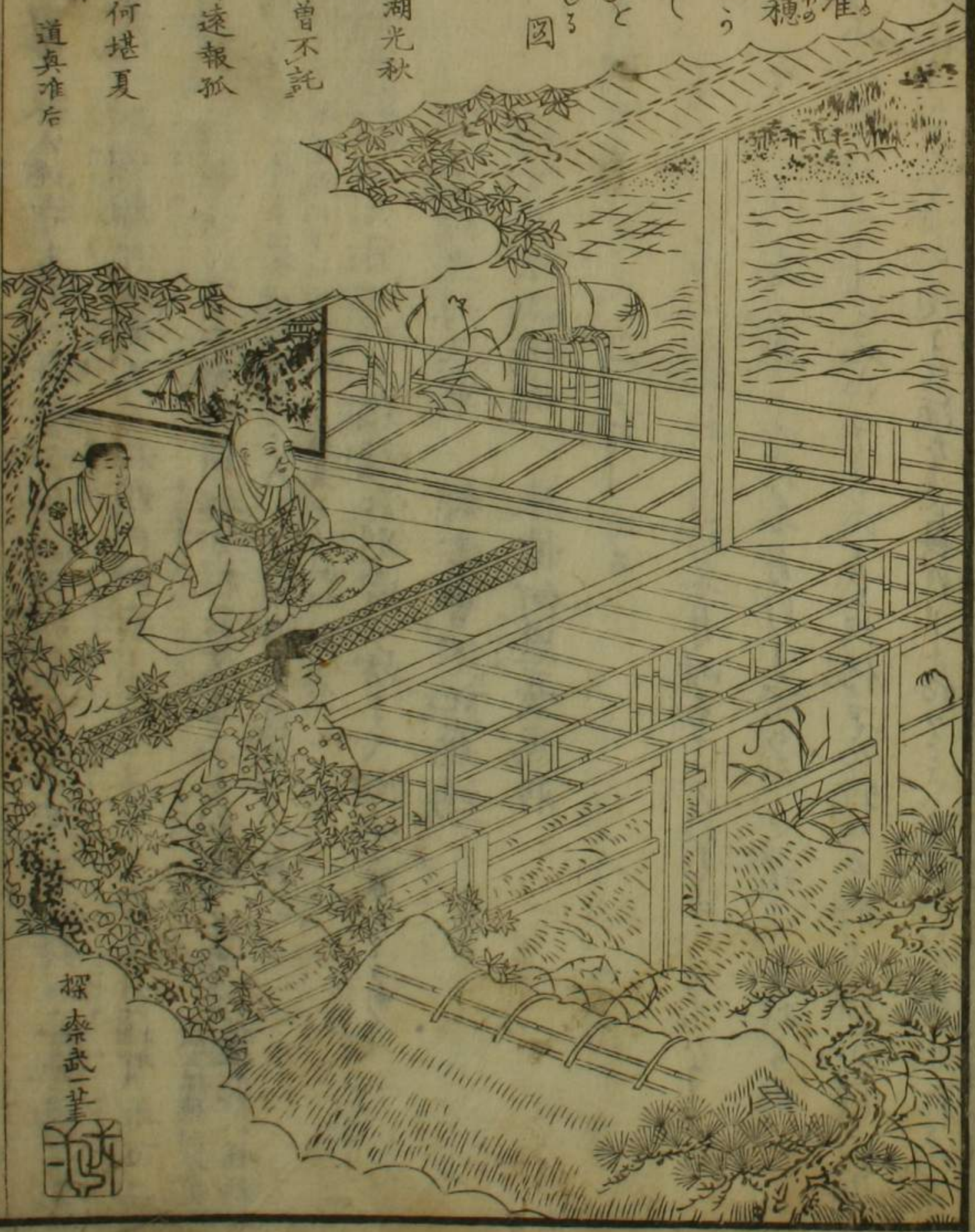
雲

道興准
后稻穂
別當
坊
湖水と
ふくし
山色湖光秋
又窮
郷書曾不託
飛鴻
砧聲遠報孤
村晚
旅懷何堪夏
患躬
道真准后

○成田参詣記卷五

○四十六

探索武一筆



○太田屋敷云此寺もとい麻賀多神社の別當より本号が兼師ハ本地佛と見

えたり廻國雜記小載たも稲穂の別當も是た多し今も北須賀船方二

箇村に祈願寺にて二百年前船方村に文書小も別當とあり

の別當よりハたさには此地眺望より且文明より感のよりハたさ

○廻國雜記卷上云九月廿八日稲穂に別當う坊より湖水字をたあり

山色湖光殊又窮 郷書曾不託飛鴻

砧聲近報孤村晚 旅懐何堪憂患躬

十月朔日よみ人あつたけり

よとりのふ名ふさるれとも神皇月時自てうはむ山のそしなり

なふふ春能多るうはさうのそに付るれはそれくいふほの湖

水少ううい舟の内そ酒をそ真りし休るそ富生能福湖水にうら

ふさみあくとむこけき

あさみの原さうけさるよそまたさひあふふそさるれ

稲穂とたたりりたる道小いろくは名所とも作りいひ捨の散り歌るとあり

付ししとも途中にありたる社を記さるたどるそさる

宗五墓ハ公津甚方村にあり墓本に老松ハ天保四年癸巳八月朔日死大風

小折れて今ハ石碣のそ存せり石碣ハ文化三年百

岩橋山成就院大佛頂寺ハ下岩橋村にあり寺領十石天正十九年

醍醐三寶院末なり本尊ハ大佛頂尊開基詳うたさる

弁天社に別當と兼勤む此寺慶長十六年寶永元年寶曆十年三度

○所蔵嵐跡心經 嵐跡心經と稱するもの各所小多くあり社と直雅實惠の書込

○妙澤和尚ハ嘉慶元頃の人より足利三代義満公の時世小當たり大

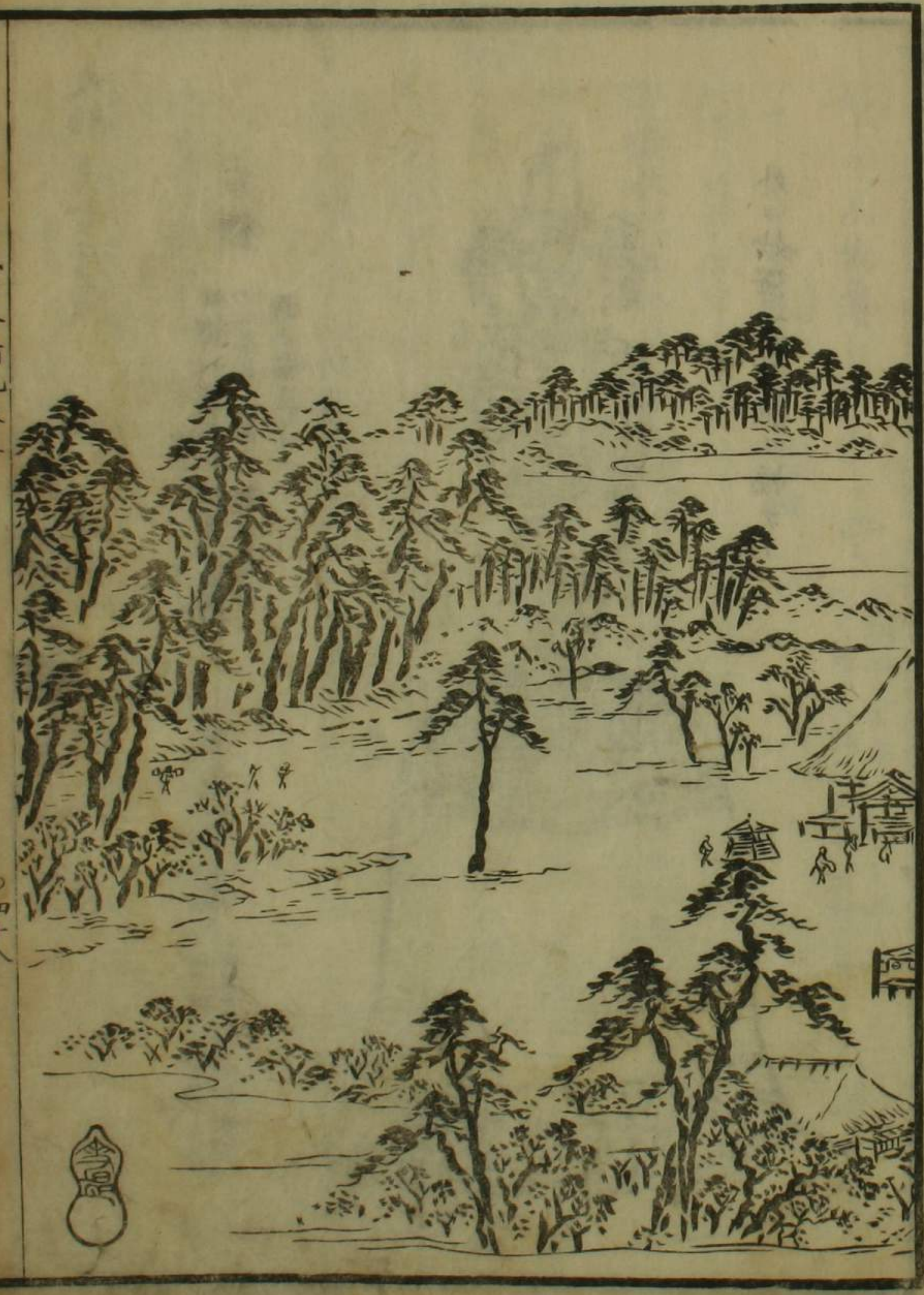
紙小妙澤ハ夢窓國師の法嗣より不動明王に化身なり兒の時より

宗五祠の圖

宗五のモハ實
録と俗傳とを膏
壤の相違り藩
翰譜及び公津村
の割付等とて
又て其誤りを
悟まへ



宗五祠



大佛頂寺所蔵

古鐸

此鐸弘法大師將未五箇の
一、元東大寺ありしと名
所小散在せり

不動像龕

寛延二己巳歲十月吉日源
乘祐公即修造現住快照寺



外ニ妙澤不動画三幅アリ

好く不動尊の形影を画す 本朝画史云毎一寺を画さざるは
なく終小正徳年小正徳吳陸甚多しと云 奇特とあり

ワセ〜と云と云 江戸名
所最會

○此寺庭前池中より出ると云ふ石のり識文小瓶麈可汲固志何傾嗚呼

群類水列與清とあり 真閑手見奈碑識とたなり 只群と節婦小作る
の此と異なり何の故なるや祥ならん

吉田佐太郎陣屋跡 久真間村小りり親縁山了善寺と云浄土真宗の寺あり

地(ま)〜里老云此寺兒童のとき吉田と名乗るとを例と云 明和年間終

ころ境内小井と穿ちたりし小石擲と土中より掘出せり其内小鏡太刀等

と蔵鏡ハ今小什寶と云り存す太刀ハ元のり埋〜と云 吉田佐太郎ハ國
初の所代官あり

○鴻臺合戦草子に去間小北條殿ハ夜半小まき終て淺草川と云ち越才ホ
塚の宿と云こ夜深に通りと云敵と松津の堤と云評儀のやと云終た
ろ終々ま〜レンセイ人目とつむことな終る小弓と云また夜深小旅立

てゆけハユウ城の浦浪小袖もさつそも志ほなまこ社やめりものさのいな家
わたりりつともたもひやる三川を越て過行こうの稻毛お松山やその松風
もふまみて心ほそく毛氣見川お川瀬の千鳥友呼も吾大君お逢つ社とさ
うをたさくと佛神ふうけてたのまお船橋の志のひくお通過おお任
行程小市川舟の渡ち我思ふ君のありやあやとこもくお社と松戸の
とうたややさうみたつとも着しうの若ささの清之助所不参りつこ云
東後宗長 永兵衛の津清澄お安房れきよと一見せようといはうひつこ
らさしてとれお世お社おち帰り江戸のまてのふも一宿してつみた川
の河舟にて下総國葛西の庄お河内と半日斗より何しと志おたりしも君
枯お波の浦おううひてく社て住し里さみえたりおらも都を堀江と
くあちして今井といふ社よりおりて浄土門の寺浄興寺にてむ之馬人
待候く住持出てもものたりお序お敷向所望もくおとくを社を程

あつたきまらけら

あつたきまらけら

方丈の西よりむらひふのまともりたうみえはるはりこまお社橋
のわたり中山の法善堂の本妙寺に一宿して翌日一折お有りの敷向
斗を所望にさうせり

あつたきまらけら

その夜の嵐れそけかりことおてこたふこと日毛お末よてう
お浦を社お一系宮内少輔胤隆小弓の館のまおお濱の村乃法善堂を本
行寺旅宿ふる十四日十五日千葉お崇神妙見の祭禮とて三百足の早馬
と見物之十六日延奉の儀樂夜に入ることおてぬ十七日連歌

あつたきまらけら

梓弓いさ人の小まつ隆とたうお世うけて種とまらけん此本歌に小弓

行徳畷の圖
 今の行徳ハ元龜元年
 川向行徳領より引移
 ると云

あさら集

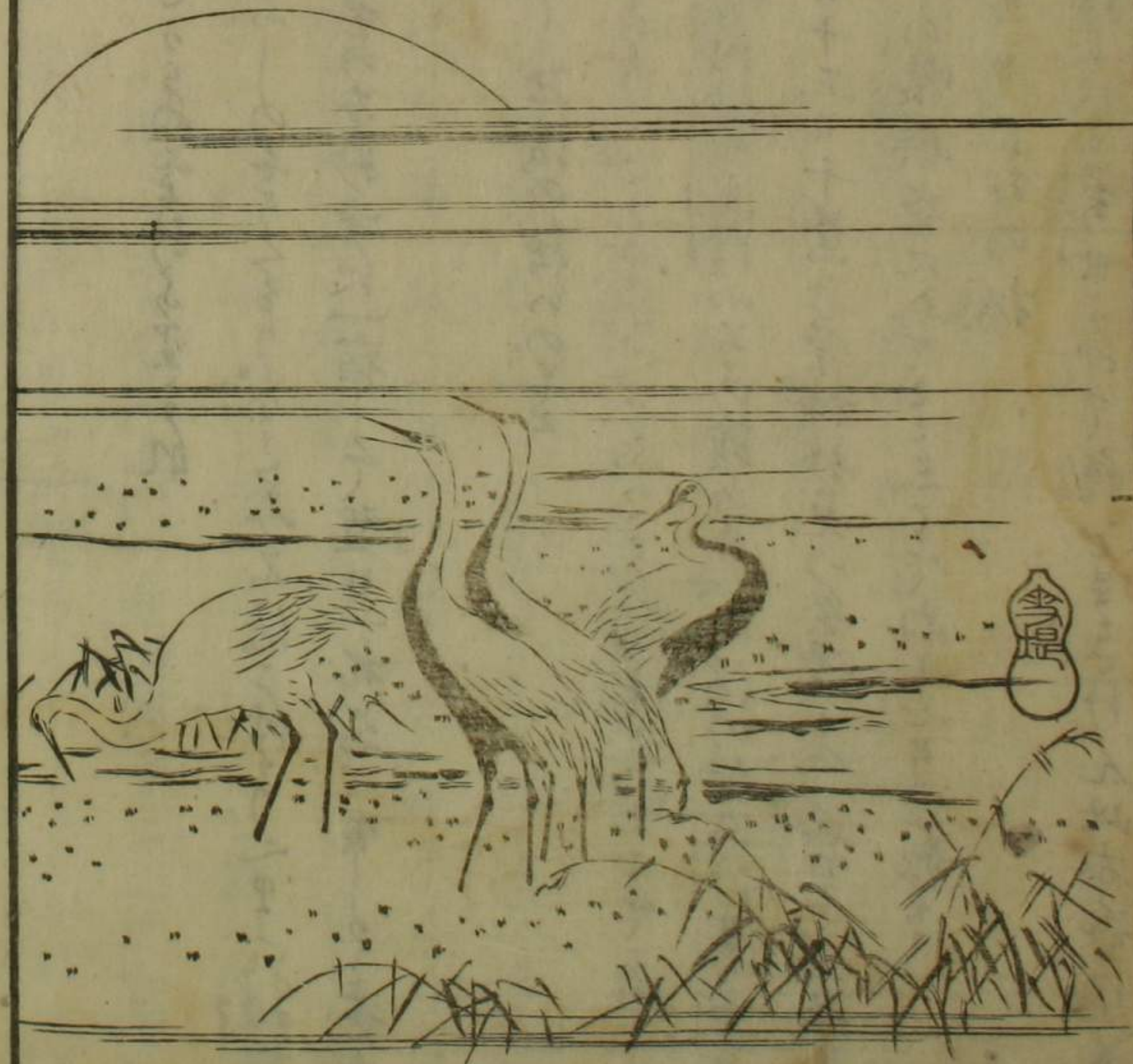
たらちねの

ふらふら

おひい

お花のちり

おきり



とり小名とくつて祝し侍斗之故の館ハ有ハ安房上総の山たちめり
西北ハ海も多くと入て鎌倉山横たつる不二の白雪半天にはーおほひて
之ゆ駿河國ふてみまうりを猶もどろけ之遠くみまはらうさ山ふまへー
十九日又連歌あり叢白胤隆

はえー夜に嵐やもむるをむむ

あころあたらしーく風情を極せり暇

庭まう所ちまきそそつる花

叢白小景氣あつふぬ社々々々今このは乃斗之を名は一塵もすうくと
しつ目のうち終りぬ夜ふ入て返車えんりんのまき衆しゆ色よまう廿餘人もま
まやーまひうたひ優ゆうふたもーろくはつたの敷そひ百ひゃくまひこらまむす
るはうらにて曉ちりくなりぬのとりたはるることれまへー又濱の村本行
寺ううて

おつきー月やーほひの演みり

胤隆此第三終日あころゆうー一塵の小うまて益たひくは社々々々の
いひーまたら斗なるその行漸しんや何きたちたんとまる夜更よてま
たらそ月まら出るほもふく立帰りー名残なごり絲ら社ぬ老れまひ小
れもひや社破の福免れやーほまむ控てうーまはる白波

休やすみひさたりー人のうたへ何もふはつー侍之とまの村とたうて
争あみ川とらふ所ふ浦風あまり烈はげしうまーうまを一言していまた日
またらうまーに人の物候の序ふ一折ふと社ことふて

まうーの藤うう門を社ぬあら社うれ

可睡かすい軒けんうまてうら送て旅宿たふくは免とわくはつて翌日市川と
つわわたりの折ふー雪風ふまてまをー休らふ間まむひの里ふい
ひあつとく人まて馬ともたりもてきてやうて舟渡りして何の社

の雪うちはらひ善者さといふ小落つきぬたもろろし朝ふくし
此雪ハ炭薪ふとそりれしうて芋と折たき豆腐をやうて一盃とを
めしハ都に柿もいふてとふふへらんそ其小入侍しけふの暮程小
會田彈正忠定祐さきさな言所あして夕やれ後天色くのとにて夜更ぬ目
廿五日とて連歌に催しふ

堤り一野を冬々の社の山落の那

市川隅田川ふたつ社中の庄之大堤四方ついでよりてありしも雪ありて
山路とりしと侍りし江戸小歸りしきて
下。水府ノ家士ニ會田生計ト云人アリ元葛
畧。西ノ地ヲ領セリト云此會田彈正ノ子孫ニ

太田ハ誅セラレテ上杉朝良
朝真ノト江戸ニアリシニヤ

武蔵野紀行 北條氏康

葛西に庄浄興寺に長老こし八十餘ふと一庵
るか迎ふつてら社寺内小立より一宿とてさうしはまけ社ハ河とわたり
ふ社寺より行て一宿はるり夜小入風ひやくふ吹たを松風入琴といふ

と思ひいそ

松風を吹おしきけまもはうらことなるねこそくくらね

宗長社祀より地理を推す小江戸に館を立今井真間を陸て中山は泊り社より
濱野本行寺に泊り十四日十五日と千葉の祭りとんそに廿二日の比まて逗留し廿二日
検見川泊り廿四日検見川を立市川をわたり會田社宿所小逗留し江戸に館小歸社を趣
なり詳ありてきて市川隅田川にふたつの中社小大堤四方よりてさうとありて社ハ
早詳ありて此社の水田よりありありしとみゆ何にも今のまとはしそはりしをそ見そはるハ
考時近郊にさゆと見るたりなり全文とあり
星住山善養寺ハ小岩村とあり寺領十石慶安元年九月十七日新義真言醍醐三寶院末世と知ら社たる
不動尊ありて今ハ大地之小岩ハ市川と相對して善養寺ハ往來より南に方あり此寺兩年
預と云役寺あり城中星降松不動影向石所蔵古磬佛舍利出たり法印権大僧都賢融
大和尚慶安四年辛卯正月十三日とあるも碑あり中興の傍なるべし

成田參詣記卷五大尾



江川仙太郎刺

